

季刊 史料と伊能図

伊能忠敬

研究

一九九九年冬季 第十八号



伊能忠敬研究会

表紙図解説 伊能忠敬記念館蔵 文化元年大図(部分) 松島

伊能忠敬が第四次までかかって東日本の測量をおえて、文化元年に提出した大図の一部である。正式な名称は自江戸至奥州沿海図第十 自開上至石巻 (86^{mm} × 110^{cm}) という長い名前である。

ここに掲げたのはそのうちの松島の部分である。島々が多い松島では海中で縄を張っている。印刷ではよく見えないが測線は岩と岩の間の海中をまっすぐにとおっている。

仙台を測ったのは第二次測量である。第一次測量では厚岸まで距離の計測は歩測であった。第二次測量では縄を張るときめると徹底して間縄をあてた。塩釜から松島に船で向かうとき、松島の村役人が船で、海上の境界へ出迎えたと測量日記に出てくる。

海上に縄を張るにはどうしたのである。目標との直線上、始点と終点に船を置き、他の一隻で始点から縄を引いてゆき、縄端に終点の船を動かし、始点の船を前に出す、というような作業だったのであるか。縄が沈むようなら、鈎で縄の途中を支える船が要るだろう。海中の測量は大変だったろう。

陸上部分はほかと大きな変わりはない。沿岸風景の概略を絵画風に描く。

〔題字は忠敬の筆跡〕

(渡辺)

目次

(表紙写真解説) 目次

巻頭エッセイ

「協」の二画を目指して

史料紹介

内弟子・小者たちはこうして集められた

ニュースとお知らせ

朝日新聞報道

伊能ウオークのお知らせ・その他

九州支部例会報告

大学入試センター試験

研究ノート1

頒曆所雑記

史料紹介

伊能家文書紹介 十一

●桑原隆朝(つづき)

●批柳嶋

●知らされていないなかった長男景敬の死

地域史料

文化三年 測量御用記

芳名録より

研究ノート2

歴史のなかの伊能忠敬 三

●「緯度」と「経度」の探求

伊能図探求 十六

ニュース速報・編集後記

(裏表紙) 英文目次

西野 元	1
渡辺 一郎	2
石川 清一	4
伊藤 栄子	5
伊藤 栄子	6
安藤由紀子	7
伊能 陽子	8
岡本 暉子	13
菅波 寛	17
菅波 寛	19
芳賀 啓	22
渡辺 一郎	24
渡辺 一郎	25
伊能図探求	29
ニュース速報・編集後記	33

「協」の一画を目指して

西野 元

昨年五月、伊能忠敬記念館が装いも新たに開館した。館の前は古い町並みを水面に映す小野川の流れである。館から川に沿って私の足で百八〇歩、佐原の中心を通る香取街道に出たところに忠敬橋がある。地元では「ちゅうけいばし」と呼んでいるが、この名前は昭和四三年に架け替えられてからである。古くは大橋（おおばし）という木橋であったが、明治十五年石造橋に改めた際、当時の町の衆が力を合わせて作り上げたことに由来して協橋（かなえばし）の名が生まれたという。

伊能忠敬に関するこれまでの研究や関心は、彼の行った測量や成果品としての地図、後半生の生き方に中心が置かれてきたが、近年は彼の仕事に対する協力者や彼を取り巻く人間関係にまで目が向けられつつある。忠敬に力を合わせた「協」に対する関心の拡がりや深まりであると言えよう。忠敬が測量中に全国各地で多大な協力を得たことを示す資料については今後更に研究すべき地元の課題と言える。

もう一つの重要な「協」は、忠敬に関する資料の保存と彼に対する理解の広がりに関する部分にある。忠敬資料が今まで残されてきた背景には、伊能家代々の方々を始め、所蔵者個人、諸機関など実に多くの力に与っている。また、忠敬に熱い視線が注がれている現在の状況は単に研究という面に止まらず、文学、演劇、博物館等における展示、各種行事、報道、広報と数えきれないほど多くの分野の方の力によって生み出されてきていることは、記念館の利用者からも聞かれるところであり、「協」の大きさを実感している。

本号がお手許に届く頃、「平成の伊能忠敬——ニッポンを歩こう——」は既に成立し、房総の地にその歩を進めているであろう。これから二一世紀初日の完結を目指して一万キロメートルを越える全行程を踏破する中で、忠敬の名は全国に広まり、関心を持たれる方も増え、さらには忠敬に関する研究を深める多くの発見が生まれて、「協」の輪がより拡がることを期待したい。伊能忠敬記念館に身を置く者として、資料の保存と理解普及の立場から「協」の字の一画としてでも寄与することを目指している。

(にしのはじめ・伊能忠敬記念館館長)

内弟子・小者たちはこうして集められた

渡辺 一郎

忠敬は測量隊の内弟子や小者を、主として親類・友人の縁にたよって佐原近在と江戸で集めていた。忠敬が小者の斡旋を伊能家の会計士のような役割をしていた友人・大川治兵衛に依頼して、雇用条件をやりとりした文化四年六月十一日付け書簡(早稲田大学図書館蔵)がある。

この書状は、文化三年十一月に第五次の畿内・中国測量から帰着のち、文化五年一月二十五日に四国測量に出発するまでの間に四国測量につれてゆく小者を探していたときのものである。このころ、蝦夷地に堀田撰津守(書状と同じ六月に若年寄・堀田撰津守が蝦夷地防衛総督に任ぜられている)、大目付・中川飛騨守や目付、使番、などが派遣され、仙台藩に五〇〇人、秋田藩に三〇〇人の出兵が命じられ騒然とした世相であった。公儀も物いりであること、地図仕立てにも時間がかかっているので、四国測量に何時出立できるかわからないと心配している。

「そんなわけだから、給料の一部前渡しはしない。去年は中間(ちゅうげん)には給金を年三両、支度金一両二分で合わせて四兩二分を払いました。これは煙草錢、わらじ代込みです。こんどは御用に精出してくれば、このほかに日々少しは褒美をかながえてくれる。

測量の作業は海岸の岩場など難所もあるのでだれでも勤まるわけではありません。

こちらでも坂部(測量隊の下役)に頼んで探しているので、(そちらに)候補者がいてもすぐに決めないで、身元とか年頃などをお知らせ下さい。給金の前貸しは江戸風に(少なく)したいと思っております。余計に貸して、病気にでもなつて暇を出すようなとき、返金させるのは難しいので当地ではそうします。年が若くて、役に立ちそうな、形のよい者を望みます。けっして急がず、決める前に必ずお知らせ下さい」

というような内容である。年三両の給金と一両二分の支度金は今のお金になおすと約七〇万円くらいにあたる。宿泊と食事は忠敬が払うのであるから、特別な知識も技能もない従者の給料として、当時ではけっして安くはなかつたろう。しかし、水や食べ物物の違う遠国に出掛ける骨折りを含めると高過ぎもしない、経営者・忠敬の判断だった。わらじ・煙草代は自弁としっかり念を押ししている。もちろん、内緒で寝酒を飲むのも自弁である。よく働いてくれれば、働きに応じ時々褒美の金子を与えるという。だが、お金につられても、測量の作業は海岸の岩場・崖など大変な場所も多いので、よほどしっかりした者でないとは勤まらない。決める前に必ずその者の人柄を知らせるよう繰り返し念をいれている。

給金前貸しはこのころは普通だったようである。雇うときに「途中で病気になるったり、不都合があったときはどこでも、暇を出してくれてよい」という条件で雇うのだけれど、実際問題として、治療費は自弁が原則だし帰路の旅費もいるので、暇を出したとき、前払いした給金を返金させるのは難しい。江戸風に前に金をあまり渡さないようにしたいといっている。幕府直轄の測量隊に昇格し、忠敬はかなりの手当をうけているのだが、支出面では隅々まで目が届いていることがわかる。

内弟子・尾形慶助は、香取神宮の神官・尾形平馬の二男というが、実は数学者・会田安明の実子である。第二次測量から第四次測量までと、第八次測量に従ったあと、幕臣・渡辺家に養子に入り渡辺啓次郎となつてから、第一〇次測量に従事した。測量および地図仕立てに熟達し、忠敬の遺命により、文化七年に忠敬の測量法を伝えるため「伊能東河先生流量地伝習録」を著した。本書は簡単なもので、誤差の修正などのノウハウが書かれていないが、伊能測量の技術を伝える唯一の書である。

忠敬は第五次測量中に病気になる、監督不行届で隊員たちが問題を起こし、内弟子二人を破門していた。そのため、第六次の四国測量には尾形をつれていこうとした。ところが尾形は断わつてしまったのである。「病身なので行けない」と下役・坂部貞兵衛に一存で断わつたと聞いて、大川治兵衛が忠敬に残念だといつてきた。慶助は治兵衛が面倒をみていた若者だったのであろう。忠敬に何とかして欲しいということだったかもしれない。慶助はこの時三二才くらい、生意気な盛りだったらしい。忠敬は大川に答えて、慶助の素行をぼやいてゐる。

「慶助は文化元年に測量をやめてから學問に精を出し大分上達しました。それで自分で高慢になり、夜明けから昼までと、七つ(四時)ころより夜分は寸暇を惜しんで精を出しているが、地図作成の手伝いは不精で、これまでのように熱心にやらなくなっている。ときどき病気にもなっている。そして、坂部にこの上の遠国御用(四国測量)はつとまらないと申しでている。下役の坂部の話では、地図作成手伝いの仕事はかねがね聞いたほどでもなく、毎日、學問の話か、自分ひとりの意見ばかり申し立て、じっくり話もしないの

で、曆局の高橋景保と相談したうえで、御家人とも入れ替えることになつたとのことです。測量のことも、いずれ私(忠敬)に内談があるかと思つていたら、自分ひとりの考えで坂部に断わつたといひます。

断わつたりしないで、四国測量にゆくならば、あなた(大川)とも相談して、御用第一にして、學問はあまり目立たないようにするよう、よくいつて聞かせ、高慢の一刻了見をやめて下役たちのいうことを聞くよう、あなたからも、私からも意見し、役に立てようと思つていたところこの始末です」

と嘆いている。後年たいへん忠敬の面倒をよくみた尾形の若いときの振る舞いに手を焼いている感じである。同じ書簡によると、地図作成中の内弟子の手当は食事代共一日三匁で、下役は一人三人扶持である。天文方の高橋から下役は月に一匁、内弟子は四匁にしていただくよう申請しているが音沙汰がない。こんどの蝦夷地の一件ではますます延引の見込みでたいへん困っています。一日四匁にして貰わないと、木銭(宿代)米代がでないのです、と忠敬はぼやく。

六〇匁を一匁とすると、三匁は二〇分の一匁である。一匁を一五万とすると一日あたり七五〇〇円となる。忠敬のぼやくのが実感できる。忠敬によると、一日三匁は一ヶ月一匁二分で、慶助の食料、木銭、米代を引かなくても残りはほとんどないという。慶助は旧冬薬研堀の師匠の太田に五両用立て、香取(実家か)へ一匁二分渡し、彼女との手切れ金に二匁二分渡し、そのほか師匠への付け届け、小遣いなどもあつて、お金を余程渡しすぎになっている。地図ができあがつてようやく一杯です。そのあとは文無しの学者ということ。あなたや私と大分考え方が違つてこまっている、という。

学問にのめり込む慶助を忠敬はみていられない、というところである。彼自身は堅実そのもので、彼にとつては細かい金である慶助の懐にも収支均衡を求めている。そして、トバッチリが息子の秀蔵（しゅうぞう）内妻・妙諦に生ませた子）にゆく。

秀蔵も学問をすればするほど人が悪くなっている。二人は一緒になって学問に精を出し、地図製作の仕事はつけたしです。この短い夜に何時に寝るか分からぬくらい、夜遅くまで学問をしている。そして体調も悪くなり、地図も不精になって困っています。と、ぼやきが続く。ここには大測量事業の総責任者の自信はなく、学問に熱中して仕事をさぼる若者を扱いかねる現場の中間管理職の顔が覗いている。

最後に下男の無能を嘆く文章が続く。

「下男の前助は病氣持ちで、飯を炊くくらいしか役にたたない。その上、月に五、六日は休みます。そのときは庄蔵にいいつけますが、子之吉とちがいが、庄蔵の大ドン物には困っています。遠国への供はともおぼつかない次第です。千人にひとりもないドン物です。子之吉がいなかったら毎日の食事にも困るでしょう。あれやこれやと、私から指図しておりますので、世話がやけて困っています。いやはや散々である。どうしてそんな下男を雇ったのだと忠敬に聞きたいところである。あなたは人を見る目がないのですかと云われても仕方がないでいたらくである。忠敬からみたら、たいいの人が無能で役立たずと思われるが、このボヤキよりはただごとではない。忠敬は中間管理職として凡人を使う能力はあまり強くなかったような気がする。

さきの慶助と秀蔵については、暮らしのことを考えずに学問論議に熱中する二人を揶揄しているが、忠敬はもともと商売として測量を始めたわけではなく、第一次、第二次の測量では自前で大金を出して作

業をしているのに、この段階のしまりようはずいぶん不思議である。測量が収支を念頭においた仕事になっているということであろうか。

（史料は会員、安藤由紀子氏の提供による）

●朝日新聞報道

お気付の方も多かったと思いますが九九年一月十三日の朝刊一面に写真入りで次のような記事が掲載されました。

伊能地図の原点 鮮明に

大阪の小学校が写本所蔵

日本の近代的実測図の先駆者となった伊能忠敬（一七四五―一八一八年）が最初に作った地図といわれている「寛政十二年提出小図」の写本が、大阪市中央区の市立開平小学校の地下文庫に保管されていることが十三日、専門家によって確認された。

「伊能地図」の原点ともいえる小図で、將軍に献上した原本は焼失したとされる。全国では三枚の写本が確認されており、同小学校の写本は江戸後期に描かれ、彩色をこころいまで見つけた三枚と比べて保存状態がよく、専門家は「原本の姿を推定するうえでまた新たな資料が加わり、伊能図の研究全体にも価値がある」と話している。

開平小学校の前身は、一幡桃の助言で当時の当主が八七五年明治五年、北船和漢洋の書籍などを収集し場の齋所、升屋山片家が創立した第三学区十三番小学校。升屋は江戸後期の町人学者山片蟠桃が筆頭をつとめていたことが知られ、

家の鑑定を初めて受けることになった。

十三日、鑑定にあたったのは伊能忠敬研究会の渡辺一郎・代表と国土地理院の長岡正利・測図部長ら。

鑑定によると、確認された写本は縦一・九五寸、横一・三七寸。江戸から青森までの奥州街道と、蝦夷地と北海道の東海岸が記されている。

同じ小図の写本は伊能忠敬記念館（千葉県佐原市）と国立歴史民俗博物館、東京国立博物館に所蔵されているが、開平小の写本は虫食いもなく、比較的、保存状態が良いという。

渡辺代表は「幕府が門外不出とした地図が大阪にあったことが興味深い。開平小の前身の創立時に寄贈されているが、仙台藩の出入商人をした山片蟠桃が入手したものではないか」と話している。

このほど地図の展示会などを全国で開いている国土地理院が、学校側に出展の要請をしたのを機に、専門

○伊能ウオークのお知らせ

本会が、(社)日本歩け歩け協会、朝日新聞社と共催しております伊能ウオークがよいよ出発します。朝日新聞紙上などで紹介されていますから、詳細は繰り返しません。本会の渡辺代表理事が総隊長をつとめ主要な地点には出かけます。本部隊の学芸員兼運転要員として新沢さんが、また随伴車の運転要員として大庭功さんが参加し、伊能教室の開催、ライフ・ラインの確保などにあたります。

一日単位の参加もできますので、会員各位も仲間を誘って好みの地域に宿をとって御参加下さるようお願いいたします。御参加の際は友人の氏名も含めて、大庭、新沢にお知らせ下さるようお願いいたします。

○本部隊による伊能忠敬教室開催

本部隊は時間の許す地区では、携行する伊能図複製、測量器具、測量ルート図のパネルなどを展示して、伊能忠敬教室を開く予定です。できれば各県二・三箇所は開きたいと考えています。はじめのうちは研究会会員がサポートし、次第に軌道にのせます。最寄り地点では応援に出て下さい。

○伊能ウオークサポータークラブ発足

伊能ウオークを応援する外野の応援団が国土地理院・野々村院長らの発案で生まれました。たいへんありがたいことです。研究会は外野ではなく主催者です。しっかり伊能ウオーク、特に伊能忠敬教室(含む歩測大会)を支えましょう。

○佐藤嘉尚理事退会

佐藤嘉尚理事が都合に依り退会されました。理事の欠員の補充は当面致しません。

○御寄付御礼

伊能教室の準備その他で経費が必要ですので、若干の寄付をお願いしましたが、多数の方々から御芳志をいただきました。厚く御礼申し上げます。一月二〇日現在の御芳名左のとおりです。

石井千寿子、大庭伊兵衛、金窪敏知、丹羽菊乃、伊藤栄子
浅井京子、大沼 晃、菅波 寛、植田浩一、菅 哲彦
畑古明良、武川芳男、広兼信介、吉井貞俊、小野智司
長岡正利、萩原一輝、窪谷梯二郎、大宮信篤、井上靖子
石川清一、中村宗敏、土肥規男、本田 改、中川幸子
渡部健三、大友正道、安達正剛、高島賢治、直江泰子
小島一仁、加藤 児、宮山市郎、小林正雄、豊島 正
中村忠弥、吉田 晃、大内繁男、原口光和、星 弘代
矢能 彰、橋本新治、庄田元男、小滝規子、渡辺植子
垣見壮一、藤岡健夫、横川淳一郎、安藤政彰、宇田川豊次郎
古沢冴子、平野誠一、平野祥子、江口俊子、栗田義弘
香取孝勇、武田 威、谷垣忠利、石田定雄、伊能洋・陽子
安藤由紀子、吉野 敏、藤田宏・淑子、佐久間達夫
入江正利、齊藤 仁、山口善市、小沢健一、山本公之
小池美幸、香取嬉良、久保木恒雄、渡辺一郎、中富道利
岡部孝子、河西 浩、今泉智恵子、山品信義、村上昭三
的野圭志、芳賀 啓、阿久津綾子、金兵房子、首藤郁夫
香取 武、香取秀紀、島崎恭一、高橋勝美、河島悦子
内藤快範、清水靖夫、古賀英稔、佐山安太郎、永野達代
本郷靖枝、北田明子、成家淑子 (到着順、敬称略)

(九九名、一五七口)

九州支部例会報告

石川 清一

十一月十四日（土曜日）、晴れ。九州支部秋季例会が、本部から渡辺一郎代表理事を迎えて開催された。二カ月前に「朝日カルチャーセンター」と特別講座開催が決まり、まだだいぶ日があると思っていたが、だんだん近づき十一月に入ってから準備で少し気ぜわしい日々で、うまく行くかな、と若干気を揉みながら開催日が近づいた。前日に福岡空港に渡辺代表のいつもと変わらぬ元気なお顔を拝見し、先ずはホッとしていよいよ十四日、期待の例会が始まった。

今回は第一部として、渡辺代表を講師に「朝日カルチャーセンター福岡」で一般受講者を入れた特別講座（講演）を開き、第二部に九州支部の例会・懇親会を行った。さて、当日、第一部の会場のJR博多駅前の「朝日カルチャーセンター」には旧知の懐かしい会員諸兄が奥様、お子様、友人・知人等とご一緒に続々と集まり、伊能忠敬研究会の存在を大変心強く感じた。特別講座は午後一時半からカルチャーセンター木原講座部長の講師紹介を皮切りに「再発見・伊能忠敬」をテーマとして渡辺代表の講演が始まった。熱心な忠敬ファンの一般参加者も含め二六名の受講者は、忠敬の生い立ちから、家業に精を出し財を成した商人としての忠敬、測量を開始した動機、伊能図の特徴、五十才で隠居した後第二の仕事である測量に全国を歩いた忠敬の人物像の話に聞き入り、またOHPのスライドで上映された伊能図の美しさ、精度には驚嘆の声が上がった。必ずしも伝記にあるような修身的な偉人ではなかった、という渡辺氏の「忠敬・再発見」の熱き講演に聴講

者一同もぐいぐい引きこまれ、あっという間に二時間が終わった。講演の最後に伊能忠敬研究会の概要を紹介する時間をもらい小生からPRさせて頂いた。

続いて四時から第二部として、会場をJR博多駅新幹線口近くの「八仙閣」に移し、会員十一名が参加して例会・懇親会を行った。会場では「御用 測量方」の旗を立て、一同記念撮影を行い、長老、松尾会員の音頭で乾杯後、渡辺代表を囲み持参の地図を拝見したり、伊能イベントにまつわる興味深いお話を伺ったり、また会員各自の個性あふれる自己紹介や、二〇〇〇年に九州に来る伊能ウオーク隊への参加等、賑やかに話が弾んだ。懇親も深まった夕刻七時半、中締め。各自の忠敬像の膨らんだ一日でした。

九州支部は九八年春に発足（年二・三回位の活動を目標）したばかりですが、夏には有志七名で「伊能測量隊の泊まった宿」を標榜している佐賀県鹿島市の諸国屋旅館に日帰り研究旅行を行うなど徐々に活動が増えており、会員も多士才々で、今後も気軽に発表や意見交換、話し合いが出来るような会にし、少しでも忠敬先生の業績を拡めるのに役立つ活動をしたいと思っています。会員二・三名と少ないですが今回の例会を企画して行く中で、朝日カルチャーセンターや国土地理院九州にも関心のある方がいる様子もわかり、忠敬ファンの拡がりを中心強く感じました。入会者もこれから増えると思います。全国の会員の皆様、これからも温かい友情と、ご支援をお願いします。最後になりましたが渡辺代表、遠路にも拘らず、また手弁当でご来港頂きありがとうございます。九州支部会員各位、ご協力に心から感謝いたします。

（いしかわ せいいち・九州支部長）

地理B

問 2 同じく下線部③に関して、日本の正確な形は、伊能忠敬が測量して作成した地図によって、19世紀中ごろになってヨーロッパに伝えられた。次の図2は、伊能忠敬が作成した地図の写しの一部であるが、この図の特徴について述べた文として誤っているものを、下の①～④のうちから一つ選べ。 30



図 2

- ① 島や岬から引かれた直線は測量のための線を示している。
- ② 右端には方位盤が示されている。
- ③ 空白部は未踏査地域を示している。
- ④ 「西一度」の線は東経 135 度を示している。

●大学入試センター試験問題

九九年一月十六日に実施された、全国統一の大学入試センター試験の「地理歴史」問題のうち、地理Aと地理Bの共通問題のひとつとし

て次のような出題がありました。「伊能ブーム」の反映とみるべきでしょうか。さて、正解は？

頒曆所雜記

伊藤 栄子



浅草天文台（北斎「富嶽百景」）

葛飾北斎の「富嶽百景」の中に
ある「鳥越の不二」と題した曆局の
絵である。実際に北斎が曆局へ行
って描いたといわれる。当時の様
子を伝える絵として貴重である。

さきごろ友人から、青梅の石灰文書の一紙が送られてきた。青梅市立郷土博物館所蔵の石灰文書は初見であった。この文書の項目には、幕府の御用石灰を納めた場所が夫々しるされている。その中に頒曆所の名があった。しかし年号はなく、ただ申年納めと書いてあった。これでは十干、十二支が揃わないから、年代の判定はむずかしく今後の調査を待たねばならない。浅草頒曆所とあるので、たしかに鳥越の曆局のことである。そこでこの機会に頒曆所の変遷を調べてみた。

曆局のこと

この曆局とは、頒曆所、司天台、測量台、時には天文台などとよばれ、幕府の天文方がここに詰めて仕事をしていた役所であった。伊能忠敬が隠居後江戸にて、黒江町の自宅から曆局の高橋至時のもとに通い、天文学、曆学、測量等を学んだのは周知のとおりである。そこで忠敬自身は、尊敬する高橋至時のいる曆局を、親しみを込めて高橋

御役所と呼んでいたことが、娘の妙薫へあてた手紙にも出ている。

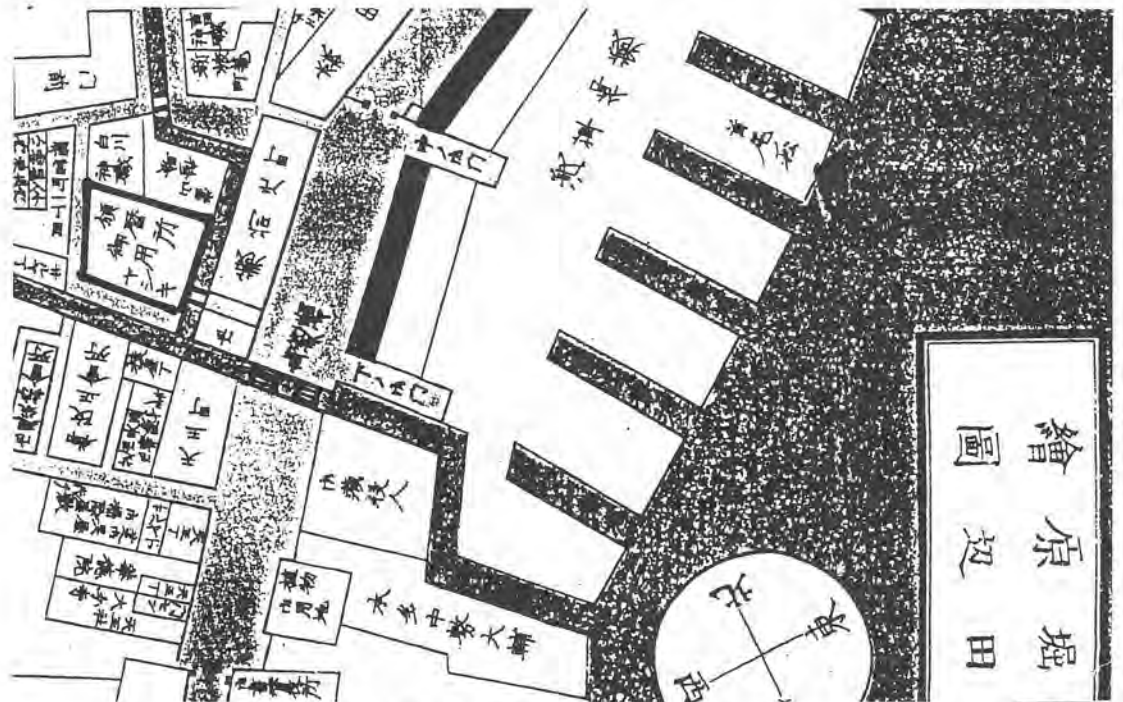
伊能忠敬は十数年にわたる全国測量の間、実に小まめに、曆局の至時、その後は景保へあてて書状を出している。もっとも忠敬の書状も途中からは、幕府の老中職により、公儀天文方として手厚い保護を受け、領主便で運ぶよう差図されている。曆局との交信は長い測量の期間、忠敬にとって一つの支えになっていたのであろう。

司天台は貞享二年（一六八五）幕府によって、はじめて牛込薬店に設けられて、天文方の研究が始まった。その後元禄二年（一六八九）本所二丁目、さらに同十六年に駿河台へ移り、神田佐久間町から明和二年（一七六五）牛込袋町、そして天明二年（一七八二）浅草鳥越の片町裏に設置され、幕府が崩壊するまでこの地にあった。

曆のこと

私は旧曆のことで、かねがね悩まされていた。古文書を解説していて、出てくる月日を現在の新曆になおすと、いつに当るかという問題である。例えば、昔のある月を今の月になおすと二十日の差なのに、別の年のある月をみると五十日もずれるという事になる。凡そひと月の差などという答えはできないのである。この摩訶不思議な旧曆には、前から関心があった。頒曆と曆、どの様な関わりがあったのだろうか。

頒曆とは、一言でいえば曆を頒布すること。江戸での曆の発行は他の地方とは違い、自由な出版事業として早くから行われていたようである。他の地方の曆師のように、土御門家の支配下には入っていなかった。江戸では曆師でなく、商人の曆問屋がその発行を取りしきっていた。しかし元禄十年に曆問屋間の支配権争いの結果、十一人が幕府認可の曆問屋と定められ、自由出版業ではなくなり、幕府に対して一定



片町裏の頒曆所 (図の左端)

の冥加金を納めた上で、曆問屋の株を所有することになった。毎年八月に頒曆所から曆の原本を受けとり、曆問屋が摺りあげてまとめ、夫々の小売店におろされる。十二月頃、そこから初めて庶民は買うことができるので、問屋からの直販買は許されなかった。

また、認可外のものに、売買するものではなく、商人が暮に得意先に配ったり、豪商が金にあかして絵師に描かせた豪華なものまであった。頒曆でないものに、賦曆(くばりごよみ)というのがあり、商品ではないが寺や神社から土産として配られたものがある。檀家の格式でお札料や神社の初穂料にも差があるように、多種の曆があつて全国に頒布されたといわれる。

曆の歴史は古く、もともと中国から伝わったものが幾つかあつたが、平安時代に入って宣明曆が用いられることになった。当時これは唐で使われており、すぐれた曆であつたという。そのうち朝廷や公家の衰微、戦乱などにより、京曆が地方に伝達されにくい情勢がつづいた。しかし地方の文化が興隆するにつれ、曆の需用が非常に高まってきた。

農業や行事などと深い関係があるので、各地に地方曆が生れてきたが、いずれも「宣明曆経」を主として、これから編曆したものといわれる。東国の曆のなかで一番早く発行(鎌倉中期頃)されたのが、伊豆国三島神社の三島曆であつた。三島曆はあまりに細く字が書かれていたので、古くから細かいものの例によく用いられた。現在も茶方では細かい点のような文様の器を、三島曆手または、たんに三島とよぶ。

江戸初期には他に京都の曆や、南都曆、会津曆、伊勢曆など各地で曆が版行されていたが、その発行は全く規制されることはなかった。

徳川幕府へは三島神社の社家である河合氏から、三島曆が献上され主に用いられていた。勿論これは宣明曆によって、計算されたものであつたが、宣明曆の使用はすでに八百年以上にも及んで天象と合わなくな

り、しばしば日食、月食の予報にも失敗するようになっていた。

貞享、宝暦、寛政、天保の改暦

幕府の体制も安定し、学術も盛んになり、天文、暦学、暦算などを研究する者が多く出てくるようになり、幕府も支配者の立場から改暦のことは放っておけず、ついに改暦の仕事は渋川春海に命じたのである。春海は播磨国の出身で、京都で親交のあった土御門家とともに実測に基づく天文の研究を行い、ここに貞享元年改暦の宣下がおこなわれ、翌貞享二年（一六八四）初めて日本でつくられたのが「貞享暦」であった。これはやはり中国からきた「授時暦」を基礎として、これに経度差を加えて作成されたものといわれる。

こうして渋川春海が最初の幕府天文方に任命され、はじめて牛込薬店に司天台が設けられた。これによって初めて作暦権が朝廷側から幕府へ移行した。これを機会にいままで各地方の寺社に属する暦師が作って、内容もさまざまであった暦は、薩摩藩を除いて全国的に統一され、その版行も幕府の許可を得たものだけに限られるようになった。

しかし総てが幕府に移されたものではなかった。暦の天文学的な部分を幕府が受け持ち、日時、方角の吉凶、禍福、禁忌など、また宮中の儀礼の執行等に関しては、陰陽頭である土御門家が扱う事として分担が定められたのである。

「貞享暦」は春海の編纂した暦法であったから、土御門家もその門人となった。また春海も神道家であったから、土御門神道の門人となりその興隆に努力した。こうした配慮により、一見円滑に行われたかにみえた。

ところが、そのあと八代將軍吉宗が西洋天文学をとり入れて、改暦

しようとした宝暦の改暦では、幕府天文方に実力者がなく、まもなく吉宗の死去もあり、土御門家の当主泰邦の巧みなかけひきによって、編暦の実権は土御門家のものとなった。

このようないきさつで、宝暦五年（一七五五）で上がった「宝暦暦」は「貞享暦」を改悪したと評される程ひどいものであったという。「宝暦暦」は採用の八年後には、早くも日食の予報に失敗した。

この時代の暦局は、頒暦所といわれていた様に、天文学、暦学、暦算などの研究よりも、暦の編暦が主な仕事であったようである。したがって、その後寛政七年（一七九五）公儀で改暦が決定しても、江戸には専門知識のある人材がいなかった。そのため幕府は大坂（阪を用いるのは明治以降）の天文学者麻田剛立を起用しようとしたが、老齢のため辞し、その高弟の高橋至時、間重富を推挙したのである。寛政七年（一七九五）二人は相次いで江戸へ出て、至時は天文方に任せられた。

伊能忠敬はこのあと間もなく至時の所に入門している。至時は重富と共に漢訳本の「曆象考成後編」を参考にして、「寛政暦」を完成させた。以来作暦権は再び土御門家より幕府天文方のものとなった。

天文方渋川家は春海以後は昔日のような隆盛はなく、やっと家名を維持するよう有様であった。高橋至時の次男景佑が文化五年（一八〇八）八月に渋川家の養子となり、文政六年（一八一三）天文方になってからは、春海以来はじめての実力者が後継者になったことになる。

この景佑こそ前の名を高橋善助とあって、第五次測量に副隊長格で参加し、忠敬を補佐した人であった。非常にきちょうめんで細かな書付でもきちんと整理し、自分の調査研究も「雑録聞見録」の名で残しているという。和漢蘭の諸学に通じ、暦学に関する多くの著述もある。

渋川家は春海以来代々の天文方となり、表向きは土御門家の門人と

して従ってきたが、渋川家九代の景佑は門人にはならなかった。

景佑は兄景保と「ラランデ曆書」の取調べに当たったが、景保（文政十二年シーボルト事件で獄死）のなきあと、足立信頭シツトウと共に、西洋曆法による「新巧曆書」を完成させた。信頭も大坂の麻田剛立の弟子である。足立家も渋川家と共に幕末まで、天文方を代々受けついできた。天保十二年「新巧曆書」によって幕府から改曆案の作成を命ぜられ、景佑が中心となり、信頭の協力で作られたこの「天保曆」は、弘化元年から施行され、それは江戸期最後の太陰太陽曆であり、最新の天文学を取り入れて完成させた最も優れた曆になったといわれている。

西高東低の文化

寛政の改曆以来、江戸の曆局は活気を取り戻した。高橋至時は学究として東西の曆法を学び、その当時曆学の第一人者であった。享和三年春、堀田拱津守正敦からフランス人ラランデの天文書を貸与され、調査を命ぜられ、内容の精詳なことを知って翻訳を決心する。これは蘭訳書であった。以後半年間、乏しいオランダ語の知識でよくこれをまとめたという。その間、弟子の教育や伊能忠敬の測量計画の推進などが重なり、ついに翌文化元年正月、四十一才で不婦の人となった。

高橋至時が亡くなった時、長男景保は二十才であった。そのためいったん帰坂していた間重富が景保の後見役として再度曆局へ招かれ、至時が完成できなかった「ラランデ曆書」を取調べることになった。景保は語学に堪能であり、特に満洲語は多くの著述があるという。伊能忠敬の測量をよく援助し、日本全国測量と地図を完成させている。

文化四年幕府により曆局内に地誌局が設けられ、同八年には

蛮書和解御用（洋書翻訳局の意、蕃書とも書く）が置かれた。これらの設置は、全く高橋景保の政治的手腕によるものといわれる。

蛮書といえはこの人、馬場佐十郎を忘れることはできない。文化五年曆局で万国全図を補訂するため、語学力のある者を求めていた。最初、蘭語学者として当代随一といわれた長崎の中野柳圃にその役を依頼したが、柳圃は病気を理由に断った。馬場が二十才の年、師の柳圃が他界したために、幕府からの招きを受け、天文方高橋景保のもとで洋書の翻訳をすることになる。馬場佐十郎貞由、号は轍里、彼は長崎の通詞であった。彼は十代の後半から語学をはじめ、すでにロシア人オランダ人、イギリス人らを驚嘆させるような語学力を身につけていたといわれる。もっと驚くべきことは、この時代すでに蘭語、魯語、（露の字をあてるのは、日露戦争後）、英語、仏語、中国語、満洲語、アイヌ語、ラテン語まで手がけていたのである。

「ラランデ曆書」の翻訳も重要な仕事の一つであった。馬場は江戸に出て間もなく、ロシア婦りの大黒屋光太夫（ロシアへ漂着した伊勢の漁師）から二年間、公命によりロシア語を学んでいる。また三新堂という私塾を江戸でつくり、蘭学者の養成にもつとめている。大槻玄沢、宇田川玄真親子、杉田立卿、恭卿らは彼の門人であった。

文化八年（一八一）ロシア艦長ゴロウニンが国後島でとらえられ、松前の牢に送られた。その翌々年の文化十年には江戸から新任奉行と共に、曆局から足立左内（信頭）と馬場佐十郎が通詞のため出向いている。この年二十七才になった佐十郎はここでも語学に磨きをかけた。彼の任務のもう一つの仕事は、他の翻訳書のはかに、ペテルブルグ版の「牛痘撰取について」というロシア語の日本訳であった。蘭、仏の両語はともかく、ロシア語を修得し、翻訳までしたのである。このことは間もなく、日本に牛痘接種が取り入れられるきっかけとなった。

安政五年、蘭方医達の協力により種痘は始められている。それにより幼児の命がどれ程救われたことであろう。間重富は佐十郎の人柄を愛し、娘を彼に嫁がせている。二人の子までもうけたが、なぜかのち離婚をし、重富は娘と孫二人を大坂へ引きとったのである。

文政元年浦賀へ英船が入港し、暦局から佐十郎が弟子の宇田川榕庵をつれ通訳のため出向した。この時英船長と親しくなり、種痘のための牛痘の種をもらっている。英語も自由に使っていたあかしである。

文政五年（一八二二）再び浦賀にイギリス船が入港し、佐十郎は幕命によってまた通詞をつとめたが、この年七月彼は肺病のため、暦局邸内で三十六年の生涯をとじた。この語学の俊才は江戸に蘭学の新風を送りこんだ人である。やがてこの暦局にあった蘭書和解御用は、文久二年には洋書調所、明治二年に開成学校へと受けつがれていった。

新政府になって

幕府が崩壊しても、新しい組織ができるまで、天文観測や、編暦、頒暦等は一日もおろそかにはできない。当時の天文方の能力は高く評価されるものがあり、天文理論だけでなく、欧米の事情にも明るい技術者が集まっていたのである。それにも拘らず新政府は、幕府天文方にかねがね反感を持っていた土御門家の願いにより、天文、暦法の一々の権限を同家に委ねてしまった。

明治二年三月十五日に、浅草天文台は当分の間東京府に管理を仰せ付けられ、翌月正式に廃止と決定された。そのころの元の司天台の状況はといえば、外構の板塀が大破して通りぬけ自由となっており、その他の箇所も修理が必要な程ひどい状態になっていたという。暦局のある場所は、奥州街道に近く浅草蔵前の立地条件がよいことから、跡

地利用の価値も高いため、まもなく民部官から御取潰しの指示があった。この浅草天文台の廃止に対し、元天文方の足立左内（信行）から、天文台の再興を望む建言書が提出された。

「然ニ先般御一新以来測量局（天文方）御廃止、観象台諸測量器等御破却相成候段、実ニ其道ヲ学ビ其術ヲ業ト仕候者共、悲歎涕泣ノ至リニ御座候」と、天文方や天文台の廃止、天文器械の破却を残念がつて、速やかに測量局の再興を願っている。

しかし結局建物は解体され、器械類は開成学校に引き渡された。開成学校はのちの東京帝国大学であり、引き渡された天文台の機械類は、同大学天文台に引き継がれたということである。

現在暦局の跡は浅草橋三丁目の辺で、江戸通りの繁華街を西へ入ったビルと家並のたて込んだ町である。渡辺一郎氏の話によれば、暦局のあったとされる敷地に、今は中根リボン店という店があるという。

また暦局よりも古くからこの地にあった鳥越神社の由緒書には、幕府の天文所があった付近を、天文原とよんでいたと書かれている。せめてこの場所に、標識でも立ってほしいと思っただけであろうか。

参考資料

- 『万有こよみ百科』新人物往来社
- 『江戸洋学事情』杉本つとむ著、八坂書房
- 『暦の百科』新人物往来社
- 『最後の江戸暦問屋』寺井美奈子著、筑摩書房
- 『明治改暦』岡田芳朗著、大修館書店
- 『暦』宏瀬秀雄著、東京堂出版
- 『国史大辞典』吉川弘文館

伊能家文書紹介十一 その一

桑原隆朝 (つづき)

安藤 由紀子

第二次測量出発前のトラブル

寛政十二年十月二日、伊能測量隊は第一次測量から帰着。すぐに地図仕立てにとり掛り、暮れも押し詰まった十二月二日、地図は天文方を通じて幕閣へ提出された。

提出前日、多分出来上がった地図を見てもらうため、忠敬が義父桑原隆朝宅を訪れると、「来年の第二次測量の計画書を書いておきなさい」といわれた。蝦夷地の北部がどうなっているか、よく分かっているのに、これがまた大胆にして壮大な計画なのでびっくりする。

寛政十三年(一八〇一年、この年は二月に年号が享和キョウワとなる)正月五日、忠敬は桑原氏と高橋至時オシトキ先生宅へ年始に出掛け、およそ次のような計画書を持参して二人に添削してもらった。

史料 一

『伊能忠敬測量日記』より抄録 千葉県史料・近世篇

1/5 一、安房・上、下総・奥州の東海岸を測り、松前から西蝦夷の海岸を測り、クナシリ・エトロフ・ウルフへ出、この三島のどれかで、八月十五夜の月食を観測し、前年測量した部分につなぐ計画です。

一、昨年の地図には欠点があります。人足不足で大方位盤を函館に置いたまま小方位盤だけを使い、距離も歩測のみでし

たから、本当の地図とは申せません。道具持ち運び人足一人、馬一匹と長持ち一棹オシ御用立てくだされば、真の地図を差し上げることが出来ます。

一、クナシリなど三島で月食を観測すれば、江戸より東へどの位の開きがあるか分かり、地図全体のしまりにもなります。一、松前で船を買い上げ西回りでクナシリまで測ったのち、その船を売り払いたいと思います。

(松前から稚内を経てクナシリまで、西から北海道を一回り、しかも船で行くつもりようだ。この計画書を高橋先生から蝦夷係りに提出してもらった。同文を桑原氏から外様―若年寄堀田撰津守正敦マサナツへ御覧に入れたところ、「書面のうち道具持ち運び人足のところと、船買い上げのところは省き、計画の概要だけ書いてあとは口頭で申立ての方が良い」と仰せになった由。つまり堀田撰津守は、お金のかかる部分は文書にしないで口頭で述べよと言っているわけで、桑原氏は大変困って高橋先生に相談した)

忠敬を救った「計画の変更」

1/6 「書付けを以てしてもおぼつかないのに、口上では一層難しいでしょう。これでは真の地図はできず、無益の丹精になりますので承知できません」と先生に申し上げた。先生は尤ものことと思われ「では書付けは提出せず、自分が全部蝦夷係へ口頭で申し上げたのち、必要なら書付けを出すことにしよう」とおっしゃった。桑原氏にその旨申し上げると、(今度は桑原氏があわてたらしい)「今更書付けを出さないでは、御内覧に入れた方に申訳が立たぬ」と、翁はわざわざ当家へ

お出でになるし、長男の養好さまを先生宅へ遣わされた。

このあと三人でいろいろ相談したが、持ち運び人足と船の手配の二件はどっちにしてもお許しが出ないだろうという事になり、去年通りのお手当てでも日本の海岸線だけなら測る覚悟があると申し上げた。そして、今年度は西蝦夷は取り止め御府内から奥州までの海岸を測り、帰りは奥州街道を再測して正確を期することにした。

(要求した二件は引っ込め、蝦夷測量を省くという、重大な計画変更をともなつた新しい上申書を書き、桑原氏に見てもらってから、一月十三日高橋先生に差し出す)

高橋先生が何度も述べているように、忠敬はまことに「幸運の人」である。第一次測量以降、彼は蝦夷地に足を踏み入れていない。もとの計画通り蝦夷地へ行っていたら、この企ては挫折していただろう。若くて、蝦夷地での暮らしも長く、忠敬以上に執念深い間宮林蔵が、十数年後苦勞のあげく蝦夷奥地測量に成功した。そして死の直前にきちんと間に合つて、忠敬は北海道の全容を目にすることができた。

『箱訴』と計画の再変更

さらに一月二日、ピツタリ過ぎるタイミングで長男景敬^{カゲキョウ}が出府、『箱訴』出願人百姓の総代四人も次々に出府してきた。費用はすべて伊能家持ちで、昨年と一昨年二回にわたつて出願され、それに対する申渡しが、二九日にあった。伊能忠敬父子の長年の善行への御褒美として、幕府は父子へ各々銀十枚を与え、苗字・帯刀を許した。今までの苗字・帯刀の許しは領主からのもので、幕府からとなれば全国に通用するわけである。桑原氏の発案かも知れないが、忠敬のしたたか

さが感じられる。準備は第一次出発前から進められていたことになる。

2/3 高橋先生、羽太様^{ハタタマ}にお会いになり「蝦夷地へ渡ることに差支えがあるようで、本年度は伊豆半島から測り始め、奥州までの海岸を極めたい」と申し込まれた。

2/10 司天台へ出向く。先生、羽太様とご面談のところ、「この計画では蝦夷地に関係なく、道中奉行の管轄になる。そちらへ伺う方がよい」とおっしゃった由。

(またまた計画変更である。蝦夷測量を中止した代わりに伊豆半島からとした新提案は、いかにも唐突な感じがする。記録上は高橋先生の発案のようにみえるが、事情をよく知っている桑原氏か、もしかしたら若年寄堀田正敦の「ほのめかし」があつたのかも知れない)

この変更には、相応の理由があると思われる。田沼政権は蝦夷地の開発に熱心だったが、そのあとを受けた筆頭老中松平定信は防衛を主とし、寛政四年に江戸湾の防衛を強化する建議をおこない、みずから伊豆・相模の沿岸を巡視している。いままで長崎だけが防衛地域だったが、これに蝦夷地と江戸湾周辺が重点地区に加わつた。

定信はたつた六年で老中を退き、いま忠敬が登場して話が進行中のこの時代は、定信が抜擢した『寛政の遺老』と呼ばれていた人達の政権だったから、「伊豆から測る」と言えば、幕府の受けはいいはずだった。高橋至時、桑原隆朝、伊能忠敬は、いつも連絡をとりあつており、三人ともなかなかの策士である。

高橋先生はさつそく若年寄宛に、伊豆から奥州北端までとした新しい上申書を書き、「長持ち一棹(持ち人足四人を含む)・人足二人・馬一匹を御下しください」と申し入れた。

幕府はこれでOKしたのだが、忠敬は蝦夷御会所で「本当はそれだ

けでは人足が足りない」ともう一押し試みている。御役人はもう決まったことだからと応じないので、「宿場の迷惑を考え、上積みした人数で自分自身の先触れも出し、上積み分の費用は私が払います」と申し上げて、やっと一件落着した。幕府は「人馬お手当てとして、一日銀十匁宛て支給」とし、金十五両の前貸しを許した。

第一次・第二次の比較のため、史料を二つのせることにする。

史料 二

A九三 松平忠明御沙汰書

(世田谷伊能家文書)

高橋作左衛門弟子

西丸御小姓組 番頭 バンカシラ

津田山城守知行所

下総国香取郡佐原村元百姓

浪人 伊能勘解由

其方儀、兼々心願之通

測量為試、蝦夷地へ被

差遣候間、入念可相動候。

右ニ付、御用中、為御手当

一日銀七匁五分宛、被下之。

申(寛政十二年・一八〇〇) 閏四月

史料 三

B五〇 高橋作左衛門請書

(世田谷伊能家文書)

書面申上候、日本地測量

之儀、当年可被差遣候。

尤、人馬為御手当、一日

銀拾匁宛、被下置候間

蝦夷御用掛りへ可申談、
且、道中差支無之様、

御勘定奉行へ御達

御座候段被仰渡、奉承知候。

西(享和元年・一八〇一) 三月三日

高橋作左衛門

二つの文書の差は、第一次のそれは、「測量試みとして」となっていること、「御触」の発行者が蝦夷掛からそれより格の高い「道中奉行・勘定奉行」になったこと、人馬御手当での額が上がったこと、「御触」で長持ちの持参が許されたことなどであった。長持ちの持参は格式の高さを示し、測量の行列も少しだけ立派になった。先生は、「測量、あまり目立たぬようにするつもりであること、二手に分かれて行方のあることなど申し上げておいた方がいかもしれません」と、細かいところまで指示して気を使っている。

次ページの第二次の地図は確実に精度が高く、幕閣は「これはすごい」と感じたにちがいない。やはりお金をかけ、伊能の身分についても考えてみようと思っただろう。第二次試験にもパスしたのである。

桑原隆朝が、幕閣(堀田正敦)と天文方(高橋先生と忠敬)の間に立って、大変大きな役割を果たしたことを理解していただけたと思う。

忠敬より一才年上の桑原隆朝は、文化七年にこの世を去った。忠敬は九州測量中だったが、その感慨はどこにも記されていない。実際、第三次測量からは天文方と幕閣の結び付きは確固としたものになり、桑原隆朝氏の役割は終わったといつてよからう。しかし初期には、人脈の結節点として他の人には代行できない要の位置を占めた。

桑原如則——隆朝の長男

文化七年父のあとを継いで、江戸詰め仙台藩医になった桑原如則は義兄弟として、なにくれとなく伊能家の面倒をみたようである。

文化元年、高橋至時は過労が原因で（結核だったらしい）亡くなり、長男の景保は弱冠二〇才であとを継いだ。彼は七年後の同じ文化七年、司天台内の空き地に十畳一間を含む地図御用所を新築してほしい旨の上申書を提出して、幕府に断られてしまった。

文化十年御用先の九州から「黒江町の隠居宅では全国地図の総仕上げには狭すぎる」という忠敬の書簡が、家族のもとに届き始める。彼の予算の範囲で広い部屋のある家は、なかなか見付からなかった。父が亡くなり、父の家だった日本橋大工町に移り住んでいた桑原如則は、以前自分が住んでいた亀嶋町の空き家を提供して、地図御用所とすることに同意した。そして広くはない外井戸の家だが、忠敬の隠居宅よりはまじかったらしい。忠敬死後この家の主は、まだ十代の長孫伊能忠誨だった。忠誨の日記には、地図の出来具合を心配してか、勝手知ったる亀嶋町を訪れる桑原如則が度々登場する。

仙台藩の『世臣家譜』によれば、「如則は文化七年家督を継ぎ、これより先文化四年、堀田撰津守正敦侯が松前に赴くに際し随行した。また伊達十代藩主斉村、同夫人を治療し賞を得た。文化十四年、堀田撰津守侯の治療に効あって、侯より羽織一領、白銀十五枚を賞賜された」とあり、ノブさんの弟は、父桑原隆朝と同じく有能な医師だったことが分かる。彼は大槻玄沢ときわめて親しく、蘭方を加味した医学書も残している。

桑原父子は、武士と武士ならざる者をつなぎ、全国測量を成功させた。歴史にその名を残す価値のある二人と、私は思う。

それにしてもノブさんの墓と過去帳の記載と忠敬の書簡以外に、伊能家に桑原関係の史料が一切残されていないのは、どうしてだろうか。忠敬の直系が絶えて後この家を再興した伊能一族に、桑原家の影響を排除したい情念があったのではないかというのが、私の想像である。これはさまざまの伊能忠敬の偉人化伝説と源を一つにしている情念でもある。彼らは、伊能忠敬が独力で幕閣を動かし偉業を成し遂げたのだと、後世に伝えたかったのではなからうか。

(了)



(渡辺一郎著『伊能測量隊まかり通る』より)

参考文献

- 『伊能忠敬測量日記 一』 千葉県史料 近世篇
- 『松平定信』 藤田 覚 中央公論社
- 『世田谷伊能家文書』 A九三 B五〇
- 『高橋景保書簡』 八四―一― 伊能忠敬記念館蔵
- 『伊能忠誨日記』 伊能忠敬記念館蔵
- 『伊達世臣家譜』 卷之十七

伊能家文書紹介十一 その二

枇榔嶋

伊能 陽子

史料一

A一四八 内藤亀之進家来口上

口上

(世田谷伊能家文書)

一 枇榔嶋之儀 元禄十六癸未年二月十六日 国絵図
 松平薩摩守様衆より三浦
 壹岐守様衆へ 引渡之
 絵図面ニ 日向国曰杵郡
 庵川村内ニ有之候 右
 絵図 先之御領主様より
 御引渡之趣ニテ 御代官
 岡田庄太夫様より御引渡
 御座候 依之 右島
 之儀者 亀之進領内ニ
 相違無御座候 以上

内藤亀之進家来

郡奉行認役

午四月(文化七年)

吉田律右衛門

史料二

A八二 日知屋村惣代上申書

(世田谷伊能家文書)

乍恐御尋ニ付奉申上候

此度 書上帳ニ認奉差上候当村地図
 字枇榔嶋 内藤亀之進様御領分之由
 右御家来より 書付被差上候由之処 右嶋
 当村内ニ相違無之と申証拠物有之哉
 御尋御座候

此段枇榔嶋之儀 支配役所へ

先年差上候明細帳ニ 右嶋当村

地内ニ書上来候ニ付 当村之嶋ニ相違

無御座 右嶋ニて 例年二月十日 森大明神

と唱 鉾を祝ひ 漁師共 社人山伏を

頼 終日漁祭神参相勤候儀 前々より

仕来御座候 尤 右嶋漁場ニて 亀之進様

御領分村々 入会漁獵稼仕来申候

右 御尋ニ付 相違不申上候 以上

午四月(文化七年)

羽倉権九郎元御代官所

日向国曰杵郡日知屋村

百姓代

惣右衛門 印

年寄

嘉兵衛 印

庄屋

保左衛門 印

同村之内細嶋町

測量方

御役人衆中様

史料 三

A二〇四

庵川村書上げ

(世田谷伊能家文書)

百姓代	甚五右衛門印
年寄	四郎右衛門印
乙名	乗助 印

寛政六寅年九月 領内

海辺附村々 国郡村名

并 嶋之大サ等 書出候様

従

公儀被 仰出候ニ付 左之通

書上申候

日向国臼杵郡

庵川村

右庵川村之内 枇榔嶋と

相唱候場所 二ヶ所御座候

老ヶ所 廻拾町余 老ヶ所ハ

拼くニテ 纒こ之場所御座候

村方より 海上式里程之

場所ニ御座候

右之通書上申候 尤 里数

町数等は 凡之見積を以

相記申候儀ニ御座候 以上

午四月(文化七年)

例によって、測量隊へ提出する書き付けである。これらは枇榔嶋について、「以前よりこの嶋は内藤亀之進領分である」(史料一)と、そうではなく、「亀之進領分村々の入会ではあるが、日知屋村細嶋町の島である」(史料二)、と別に「枇榔嶋という場所は二か所あり、村から海上二里の所に島廻り十町余りの島と、もう一つはわずかの場所である」(史料三)というこれも常の如くの内容の三通だが、激しい争いの様子はない。さて、その枇榔嶋とはどこかと地図の中を辿ってみた。驚いたことにピロウジマが、幾つも見つかった。この文書の舞台である宮崎県の枇榔嶋のほかに、鹿児島県の坊津町、志布志町、佐多町、長崎県では美郎島、美漁島があり、更に熊本県の飛龍島、高知県の蒲葵島である。百科事典と植物図鑑を開き、「ピロウ」を捜し出す。

蒲葵ピロウ・檳榔ピロウ。ヤシ科の一つ。檳榔樹ピロウツとは別。四国、九州の海岸付近、南西諸島、台湾に分布。葉は笠、団扇などに用い、繊維をとって繩を作る。若芽、茎の軟部は食用。古くは牛車の装飾に用いた。

なるほど、こんなに役に立つ樹が自生している島なら、人々の生活の中の大切な場所であつたらうと納得した。だが、それだけではないらしい。蒲葵には、もっと深い、重要な存在価値があるようだ。一冊の本(吉野裕子『扇―性と古代信仰―』)を読んだだけでは、勉強不足だが、この「史料二」の中の「右嶋にて、例年二月十日、森大明神と唱え、鉾を祝い、漁師共山人山伏を頼み、終日漁祭神参り相勤め候」というあたりに、何かがあるような気がする。古代宗教、民俗学など、覗いてみたい魅力たっぷりの誘惑にのる余裕もなく、今回もまた、文書の紹介で終わってしまった。

伊能家文書紹介十一 その三

知らされていなかった長男景敬の死

岡本 暉子

昨秋、忠敬の第六次測量隊の隊員のひとり柴山伝衛門正弼の書いたものであろうという旅中日記が、小田原で発見されたとの記事が朝日新聞に掲載されていた。そしてこの日記には忠敬の「測量日記」には見られない様々な記述があって、それによってこれまで知られていなかった忠敬の測量活動の別の面が明らかになるのではないかと、その解明に期待が膨らんでいるとのことであった。

ところが柴山伝衛門なる人物が忠敬測量隊に加わったのはこの第六次のみで、しかもこの人物については、文化十年二月の浅草天文台の火災に際してたまたま宿直であったことから天文台の備品などを運び出したこと^{きき}、あるいは何時の時期にか進物取次上番を勤めたことがあるようだといった程度のこと^{きき}以外ほとんど何も知られていない。こうした中において、忠敬の長男三郎右衛門(景敬)が佐原の地で亡くなった時に長女の妙薫に宛てた書簡^{きき}が、伝衛門の筆になるものとしてはこれまでに発見されている唯一の文書として、世田谷伊能家に残されているので以下にそれを紹介する。

一筆申進候。残暑強御座候へ共

弥御安寧被成御凌、

目出度奉存候。此間御用先より

書状式封、相届候付、御届申候。

御うけ取被成候様申入候

且先達ハ三郎右衛門殿御病氣之處、御大切之趣、先生も

御聞及御座候間、御愁傷之段

氣之毒千万ニ被存候。尤右之段、

早々御用先へも可申遣

与者被存候へ共、遠路御用先

にて右之趣被致承知、

愁傷当惑にて御用向

差障りニ相成候ては最早

今少しにて御用済ニも候處

残念之義故、申遣義は

先見合可申与被存候。其節

伊佐衛門殿、御出府故、右之段

先生より御申談被成候由、乍併

打捨置候も如何ニ付、大病之趣ハ

申遣し候方可宜と被存候ニ付、

先便ニ右之趣ハ、御用先へも

被申遣候。右等之趣、先生より

御文通可被致候処、此節

彼是御用多ニ付、私より此段

申上候様、被仰聞候間、如此

御座候。以上

八月五日 下総佐原にて

妙薫様

浅草天文屋敷内

柴山伝左衛門

「(冠省) 先日かねてご病気の三郎右衛門殿がお亡くなりになったとのこと、先生(高橋景保)もそれをお聞き及びになり、いか程までにご愁傷のことかといたく心を痛めておられます。このことは早速にも現地にお知らせすべきだとは存じておられるものの、しかし、遠くの仕事先にて(忠敬様が)このことをお知りになって、悲嘆の余りお仕事に差し障りがあつては、あと一息でお役目も終わりというところ、心残りなので、取り敢えずは、知らせるのは見合わせておこうとの御意向でした。丁度伊左衛門殿(詳細不明)が江戸に来ていらっしゃいますので、委細は先生から(伊左衛門殿に)お話になるとのことです。しかしながら、全く何も知らせないのも如何なものか、病気が重いと、いうことだけは知らせておいた方がよからうと、そのむねは先便にてお知らせになっております。こうしたことは先生から直接(貴女様に)お手紙を差し上げるべきと存じておられますが、昨今あれこれと多忙ゆえ私から申し上げておくようにとのことでしたので、この書状を差し上げた次第です。」

ところで三郎右衛門すなわち景敬が亡くなったのは文化十年六月七日、しかるにこの文書の日付は八月五日である。この間二ヶ月が過ぎている。景保が景敬の死を知ったのはいつの時点だったのだろうか。

その頃忠敬は、第二次九州測量の途上にあつて、困難を極めた五島の測量もおおかた終りに近づき、余すところあと僅かというところだったが、その時そこで彼は、思いもかけず、まったく別の似たような悲運に見舞われていたのである。右腕とも頼りにしていた坂部貞兵衛が

病を得て急死したのだ(七月十五日)。

通信に時間を要した当時のこと、その報せは江戸の景保の許には未だ届いておらず、それがために景保は貞兵衛すなわち測量隊の副隊長が亡くなっていることなどつゆ知らず、景敬の死を知らせたものかどうかということのみあれこれ思い迷っていたのである。

そしてその頃の忠敬はといえば、息子がこの世を去つていようなどとは夢想だにせず、ただひたすら貞兵衛の死を嘆き悲しんでいたのだ。否それどころか、既にこの世にいない景敬に宛てて、自分は鳥が翼を落したも同然だとその心境を書き送っているくらいである^{注4}。

他方妙薫の方からそれまでに何かを知らせていたという痕跡も見出すことができない。上記伝左衛門の書簡の発せられた直後の手紙(八月十二日付)においてさえもなお「三郎右衛門は病が重くすぐには治りそうもないので、親類一同が相談の上、諸事万端を道喜(一族の伊能平右衛門家隠居)に頼んだ。」といった程度にとどめている^{注5}。しかし、これが妙薫の分別によるものなのか、それとも上記伝左衛門の書簡を受け取った上での景保の意に沿ったものなのか、そのあたりは定かでなく、多分に後者ではないかと推測される。

さて、一度は知らせないことにした景保、しかしながら、知らせていないことに対する悔悟の重圧に耐えかねてか、その後時を置かずしての書簡(八月十七日付)の中で、景敬に関する一節を設けて次の様な文面をしたためている^{注6}。

(前文省略)

一、扱又、御息三郎右衛門殿、大病之趣承り

是亦、痛苦不過之候 貴君御聞及候ハ、

御驚き可被成候得共、承候義不申進候は、

後悔難斗候間、申進候 扱も、当惑之事にて候
別封佐原ヨリ、委細可被申進候間、是にて

御承知可被成候 自然御養生御叶無之共、

俄、御落日ハ御無用ニ御座候 御用向も、今

暫クニ相成候間、御心強、御覚悟候て、御勤

可被成候 右之義及御聞候ハ、御痛苦候て

御病氣ニても可発哉と 甚以、不安心ニて候

生者必滅、老少不定とやらん、御覚悟可被成候

只々此上、御老躰御厭ひ、何も浮世と思召、

今僅の處、御卒業可被成候 嗚呼

(後文省略)

「子息二郎右衛門殿のご病気が重いということを知りてこれまた心痛の至りです。(このことを) あなたが知りになればさぞかし驚かれることとは思いましたが、私が知りながらあなたにお知らせしないのは後悔の極みです。ここにお知らせいたします。さぞかしびっくりされることでしょう。詳しくは別途佐原からお知らせが参ることになっていきますので、ここではこれだけしておきますが、万が一、養生の甲斐なく病状が急変するようなことがあっても、落胆なさらないようお願いいたします。このたびの測量も残りあと僅か、お気持ち強くもって、そしてそのまた一方ではいざという場合の覚悟も決めて、仕事に励んでください。このことをお知りになって心痛の余り身体でもこわされてはと心配でなりません。生者必滅、老少不定とか申します。どうかお覚悟の程を。くれぐれもお身体を

おいいになり、またすべては現世のはかなさと思つて、残りわずかの仕事を完成させてください。」

この文章は間接的な言い回しながらも、おのずとそれと分かる表現であると同時に、知らせていないことに対する自責の念や、事実の伝え方に苦悩のあとが滲み出ている。知らせるべきか知らせざるべきか、知らせるとすればどのような知らせるか、迷いに迷っていた景保の姿が眼前に浮かび上がってくるようだ。だがそれと同時に、何よりもお役目が第一との響きがいささか強く、時には必要以上に強く伝わってくるのを覚える。

先の妙薫の手紙あるいはこの景保の手紙、もしくはその双方によって、おおかた景敬の死を悟った忠敬は、妙薫に宛てて「景敬が多少なりとも快方に向かえば幸せだが、まずは難しかろうと覚悟を決めている」と書き綴ったあとに「二人の孫がいるから安心だ」と気丈な姿勢を示してはいるものの^{まう}、このとき二人の孫は未だ幼く七才と三才。年老いた身で、自分の息子それも後継ぎに先立たれ、加うるに貞兵衛までも失っていた忠敬の胸のうちや如何ばかりか。この時の忠敬、齡すでに六十八才であった。

注1 「高橋景保書簡84-2-2」(伊能忠敬記念館文書)

2 「柴山伝之助」の項『江戸幕臣人名事典』(新人物往来社刊)

3 「柴山伝左衛門書簡B-47」(世田谷伊能家文書)

4 「伊能忠敬書簡二二九(19-4)」『千葉県史料』

5 「伊能忠敬書簡二三二(19-17)」『千葉県史料』

6 「高橋景保書簡84-1-9」(伊能忠敬記念館文書)

7 注5に同じ。

地域資料

文化三年 測量御用記

菅波 寛

文化三年（一八〇五）二月、第五次測量のため伊能隊の一行は江戸出発、東海道經由で岡山に到着したのは十二月一日で、その後実測資料の整理や下図の作成などに従事し、越年した。

翌年一月十八日、岡山出発、瀬戸内海沿岸と隣接する島々を測量しながら、備後、福山へは同月二八日到着した。

福山藩は測量隊に対応するため、城下町隣接の庄屋、土屋弥惣太へ「測量御用役人様御賄見繕役」を命じた。

ここに紹介するのは、その土屋弥惣太の書留めた「文化三年 測量御用記」である。

この記録は、福山市史編纂会旧蔵のもので、現在福山城博物館に収蔵されている。

去る昭和六三年に、古文幻想会の同人である、佐原市の伊能権之丞様*（故人）より、測量隊に対応した地域資料の存在の照会があり、この測量御用記についてお知らせした。これが動機となり、伊能忠敬記念館と福山城博物館との間に交流が生まれ、測量隊の地域資料公開の道が開けた。

文化三年
測量御用記
正月 日 弥惣太

但、間狭に候節は二間にて不苦見合可申事。

一、次の間 御證文櫃 御荷物
但、番人式人袴着用被致付置可申事

一、次の間 御供衆中六人。

一、御菓子盆に入指可申事。

一、夜具村方にて用意可致事。

一、御高張 四張
但、御本陣門前左右天文場式つ。

一、御給仕人 拾人
内、上六人袴着、下四人袴に不及。

但、給仕人其村方にて指可申事。

一、水夫手遣り 三人。

一、風呂焚 三人。

一、火の廻 三人。

一、天文場番式人 袴着用
メ拾人
但、右人足其村方にて指可申事。

本陣にて諸道具用意可致品々覚

一、三方 式つ 内、熨斗、御證文。
一、御刀掛 三つ。
一、御菓子盆 四つ。
一、夜具 拾三通り。
一、浴衣 拾枚。
一、手拭 七つ。
一、上茶。
一、上白米 六斗。

一、上の間 伊能勘解由様

高橋善助様
右御両人様御一間に仕構候事。

但、間数多く有之御本陣は二間に可至事。

一、床上の方御證文箱
白木三方に乗せ可置事。

一、床下の方熨斗三方指出置可申事。

一、床前に御刀掛可置事。

一、御着の節御菓子盆に入指可申事。
但、菓子盆無之節は白木三方にて指出可申事。尤御菓子御本陣にて相調置候間改指出可申事。

一、御夜具持参に付き用意に不及事。

一、次の間 下河辺政五郎様
坂辺貞兵衛様
平山郡蔵様
稻生秀蔵様
園 清左衛門様
小坂寛平様
外に御一人様

一、御刀掛可置事。

一、御菓子盆に入指可申事。

一、御夜具村方にて用意可致置事

一、御高張入用蠟燭 拾式丁
但、拾五匁掛。

一、炭薪。

一、御昼賄仕出の儀は前夜御本陣より致用意
指出し可申事。

一、御召船え御茶道具其村々より受人可申事。

賄用意之覚

一、御上 九人。

一、下 六人

メ拾五人

外に弥惣太、下老入。

料理人 藤蔵、山三郎

配膳方 彦四郎

手遣い 保平、伝吉

メ七人

合式拾式人

(注：弥惣太日記・自筆)

正月廿七日昼より手城村^え出勤

一、御郡中に付添、水吞村庄屋佐太郎、手城

村端治、内常石村庄屋喜十、メ三人

一、御荷物方引請、坂田村庄屋茂蔵、神辺藤

兵衛、

メ式人。

一、測量御用御役人様御賄見繕役、正月廿一

日郡御役所にて被仰付候。

一、正月廿四日、右見繕役私老入にては行届

不申候付、相役被仰付可被下段御願に被
成申候処、神嶋村庄屋嘉十郎へ相役被仰
付候段、廿六日大庄屋河相氏より被仰付
候。

一、正月廿八日、右役人様手城村御着に付、

廿七日昼より手城村へ出勤、尤役廻は不

快に付、弥左衛門相頼、廿八日朝出勤。

一、相役嘉十郎病氣に付、吉津村武助俄相役

に被仰付、廿七日より手城村へ出勤被致

候。

一、正月廿八日御立、手城村圓治方八つ時御

着、野々浜村より御打始、御城下川口迄

御測量被遊候。御人数様左の通。

伊能助解由様、高橋善助様、

下河辺政五郎様、坂部貞兵衛様、

御弟子

平山郡蔵様、伊能秀蔵様、

長沢藤次郎様、小坂寛平様、

佐藤伊兵衛様。

伊能様御供

吉平様、丈助様、半治様。

下河辺様御供

角次様。

高橋様御供

惣兵衛様。

坂部様御供

栄治様。

備前より御付添

平松丈右衛門様、桜井次左衛門様、
窪田浅五郎様、幸右衛門様、

メ四人。

右御役人様、手城村御着、夫より福山、鉄

屋五郎右衛門方へ御泊り。

一、廿九日、水吞村御着泊り。

一、晦日、輛津御着泊り。

一、二月朔日、雨天御重宿。

一、同二日夜、同所御泊り三日昼船にて仕出

し。

一、同三日、田嶋村御泊り。

一、同四日、昼船にて仕出し。

一、同日夜、藤江村御泊り。

一、同五日夜、船にて仕出し。

一、同日夜、尾道御泊り。

一、同日、風波はけしく、藤江村地内測量相

残り、伊能秀蔵様、坂部貞兵衛様、窪田

浅五郎様、下丈助様、角次様、メ五人、

藤江村へ御泊りに相成候。

日高、但、壹か年に壹度廻る。

式千九百五十四万四千六百里。

月高、但、三十日して廿七日程に壹度廻る、

八万五千六百壹拾里。

大白星、四百日に壹度廻る。

(出役)

一、人足七拾四人、才料四人

藤江村

一、駕籠

一、駕籠式挺、此人足六人共 浦崎村

メ出三拾人、内拾八人残り人足。

一、人足拾式人 金見村

一、駕籠式挺、此人足三人

メ式拾人、内四人残り人足。

一、拾六人

一、駕籠式挺、此人足三人 薬江村

メ

右は藤江村より、尾道迄御荷物人足并御駕

籠人足遣口。

二月五日

一、鞆津より御召船、壹艘。

一、同所、屋付船、壹艘。

メ式艘御用相濟、二月五日晚帰候。

二月六日

一、じしやく台、三つ。

一、金くさり、壹つ。

一、棒付戸、壹色。

一、わく付縄、壹つ。

一、じしやく箱

一、本間棹、壹本。

メ船にて遣し候。

一、柳こり、四つ。

坂部様、伊能様、窪田様、丈助様。

一、明け荷、壹つ。

坂部様。

一、じしやく台、壹つ。

一、扇子箱、壹つ。

一、風呂敷包、壹つ。

二月六日

メ五品陸にて尾道へ遣候。

此三人、藤江村より出す。

同

一、御駕籠人足三人、藤江村より出す。

但し、丈助様御病気候付、尾道迄送り人

足。

同

一、人足四人、藤江村より出す。

但、勝手方長持式つ、福山迄届け人足。

右の御用記の中で特に、日高、月高、大白星(金星)のことについては、測量隊の誰かに教授されたものを記している事は興味あつたものと思考される。

(福山市三吉町五一六一一六)

※ 伊能権之丞氏は、伊能七家の一人で伊能静光氏(当研究会会長)の兄に当る。

芳名録より

— 佐原伊能家を訪れた人々 —

千載不磨

大正十五年五月廿五

吳秀三

※ 吳秀三(一八六五) — (一九三三)

精神病学者。広島出身。東大教授。精神病学の発展に甚力。また医学子史・シーボルトの事跡の研究がある。

(広辞苑)

歴史の中の伊能忠敬 その三

「緯度」と「経度」の探求

— コスモスからガイアへ

芳賀 啓

正確な天体観測の結果作成された地図の出来映えは、確かにそれまでの地図作成の概念に根底から変革を迫るものであった。しかしながらすべての地図が、本来的に「緯度」や「経度」の確認を要請されるものではなかったのである。

地図の種類は、スケールの大小から、小縮尺・中縮尺・大縮尺と区分される。しかしこの区分は相対的なもので、境界がはっきりせず、地図を扱う人々の間でも往々にして曖昧混乱することがある。フランスの国立図書館では、二万分之一を越えると大縮尺、五万分之一以下を小縮尺としているようだが、これは書誌学上の便宜にすぎない。実は縮尺の大小区分の裏側にあるのは、その地図が表現することのできる範囲というよりも、人間の空間認識や身体感覚の段階に対応する区別の問題なのである。

人類に限らず、生物には自らが通常棲息行動できる一定範囲に対応した空間認識があり、これを記憶したものがたとえ「脳内地図」ということになる。未開社会に生きる人々が、必要に応じてたちどころに砂の上に描き出す、位置関係の正確な島嶼海岸図などはその存在を示す身近な例であろう。程度の差こそあれ、身体・空間体験をベースとした「既知の世界」は、どのような人々にもそれぞれのやりかたで具備されている大縮尺地図であった。

これに対して、個的身体・空間学習の困難な小縮尺地図は、ほとんど常に「未知の世界」を扱うとあってよく、空想や教義的観念化でな

ければ、観測、理論、測量、計算、図化といった手続きを経たうえで初めて現実的な利用に耐えるものとなるのであり、この二様の地図は実は本来全く別の原理の上に成り立っていたのである。

今日、宅地や商店街の地図を描くとき、緯度や経度のデータを必要とすることはない。古代中世にあって、村図を描き、城市をプランニングするときですら、方位は留意されても緯度や経度は考慮の外であった。それでも「正確な地図」はありえたのである。

つまり、天測を欠き、緯度、経度に基かないものであっても、一定の地図は立派に地図として成立するのであって、また実用的にも十分に通用するのである。緯度、経度の計測から作成される地図は、その領域のひとつとの発展段階と必要に応じてはじめて出現要請されるものであった。

すなわち地図作成史における伊能忠敬の業績は、一般的な地図作成上の達成というよりも、あくまでも東アジア史における近代的民族国家形成期の、一ネイション領域、つまり小縮尺大領域に応じた技術的達成であったのである。

*

*

さて、前回私たちは、longitude-jatitudeが、大地は球体であるという認識を前提として成立したことばであって、織布の縦横の糸を意味した「経」や「緯」とは全く異質な出自をもったものであったことをみてきた。そうして一部の国々以外では、つい二、三〇〇年ほど前まで、「地球」という概念すら一般的ではなかった、ということもみてきた。近代的な地図の要諦は、なによりもこの球面の図化という点にあるのであって、その技術の中心になるのが経度と緯度の計測作業であった。

一般的に、ある地点の緯度は、地球の重力方向への鉛直線と天の極つまり地球自転軸との間の角度計測から算出される。しかし実は計測する主体がそれぞれの地域あるいは国に適する回転楕円体を想定しているため、たとえば互いの国の境界上に位置する同一地点の緯度は、通常は不一致となる。すなわち地球が不整形な球体であるため、地図をつくるための数値上の姿は一定ではなく、極端に言えば、地球モデルとそこから得られる地図データは、国の数だけ異なるとも言えるのである。

近代地図作成が、通常、国家ないしは中央権力を主体として担われる以上、緯度や経度といった、一見科学的で厳密な測量データにもナショナルリティという人工着色が施されていたのである。

緯度の基準については、ブトレマイオスの時代から赤道を〇度とすることで異論はあり得なかった。しかし経度については事情は異なっていた。本初子午線（〇度）は任意の設定が可能なのである。

ブトレマイオスを選んだのは「世界の西の果て」、すなわちアフリカ北西沖の「幸福諸島」（カナリア諸島およびマデイラ諸島）であった。それから後は、地図作成者の恣意によって経度〇度の位置は目まぐるしく変転した。もちろんそれは世界史の趨勢を幾分かは反映したものであったのだが、主要には「地図のナショナルリティ」の直接的表現であったのである。

すなわち欧米においては、アゾレス諸島からカポベルデ諸島へ、またローマやエルサレム、コペンハーゲン、ザンクトペテルブルグ、ピサ、パリ、フィラデルフィアを転々とし、ようやく一八八四年のワシントン会議において、本初子午線（面）はロンドン東郊旧グリニッジ天文台のエアリー子午環に落着いたのである。

これには後日談が二つほどある。まず、本初子午線から一八〇度を

刻む場合、東西いずれの方向にプラスとするかあるいはマイナスとするかという問題に決着がついたのは、つい最近一九八二年の国際天文学会議においてであった。また、カッシニ図とフランス革命という、輝かしい近代のバイオニア実績を誇るフランスは、その正統性を主張しようとしたが、結局「〇度」をパリでなくロンドンに譲った。これは一八七五年のメートル法条約で永続的な国際度量衡局をパリに設置した余裕からなのだという。英仏の間で近代標準の鞘当てと引き分け状態があったのだが、しかし一方はヤード・ポンド法を廃止することなく、逆に今日世界に冠たる英米語の威力を背景に、旧弊な単位がいつの間にか様々の局面で「世界標準化」してしまっている。後者は巷間の俗説の類いであるので、真偽のほどは不明だが、いずれにしても「世界標準」という普遍が「近代民族国家」によって担われたことを物語る逸話である。

さて、わが日本においては、イタリアの宣教師シドッチを尋問した新井白石の『采覧異言』（一七二三）が地図投影法について触れた最初の文献であり、また徳川吉宗の命を受けた日本全図の編集者建部賢弘（一六六四～一七三九）の「日本絵図仕立候一件」が、経緯線の意義と必要を説いたはじめであった。実際に経緯線が記入された日本図の嚆矢は、内閣文庫に所蔵されている、森幸安手書きの『日本分野図』（一七五四）とされている。

この「経緯線」は、後に長久保赤水の著名な刊行図『改正日本輿地路程全図』（一七七九）にも踏襲されるのであるが、これらは方法としては既存の官製日本図に、西洋伝来のポルトラーノ図（南洋カルタ）の経緯線に倣った「方格線」をかぶせた按配のもので、地図投影法を導入したものとは言い難く、緯度数こそあっても経度のそれは記入されていなかったのである。

日本における地図投影法の本格的登場は、蘭学とともに将来された世界図によるのであるが、そうしたなかで文化十三年（一八一六）に刊行された官版の『新訂万国全図』（高橋景保ほか）は、はじめて京都に本初子午線を設定し、近世晚期日本ナショナリズムの面目をほどこした点で、地図作成史上のマイルストーンとなったのである。

この『新訂万国全図』の正当嫡子である、わが伊能忠敬の『大日本沿海実測図』（中図）には、「中度」と名付けられた本初子午線が京都を子午（北南）に通過しており、そこから東西へ「東一度」「西一度」という具合に経線が走り、「東十二度」（クナシリ沖）から「西六度」（九州甕島の西端）まで経一八度差をカバーし、緯度においては「四十六度」の「北蝦夷」から「三十度」の屋久島沖まで一六度差の範囲に日本列島が描かれているのである（本号七頁参照）。



正射図法は地球から無限遠の位置にある「視点」からその半球を平面に投影する方法で、地球儀を眺めるような立体観がある。

グリニジに到着くまで、本初子午線の設定場所は、欧米以外の国においても様々なものがあった。これはまた地図史上の極めて面白いテーマなのだが、別の機会にみる事ができるだろう。

いずれにしても、地球の数値モデルや本初子午線の設定といった、近代的地図作成の基盤自体に、ナショナリズムが濃く色差していたことは否定できない事実なのであった。

伊能忠敬の地図が、近代民族国家認識の形成に果たした重要な役割は、前々回にも述べた通りである。すくなくとも一国内を人為すなわち政治区分として把握する視座を一旦は捨象し、大地球体説にもとづいた測量によって、まずは地形すなわち堅固な自然条件の把握を目的としたことは「認識の革命」であった。

しかし実は、今日通用している地図帳の多くが、比較的正確な地形、すなわち海岸線や河岸線を書き込んだなかに、様々に色分けした行政上の区画線と区分を描き、地名を記入していて、すくなくとも地図表現上は、伊能図に比較して明らかに退行的といえる面を指摘できるものである。もちろん一部には、体系的な頁構成をもち、世界をまず自然の与件として把握できる地図帳も存在するが、これらはいわば理想派であり、その種類は少なく、普及度は低い。

「日本」は、県や国郡里の集合体である以前に、「列島」であったのだし、近代民族国家は境域の内部を均質な政治空間化することによって、はじめて生成展開が可能であった。

いま私たちの認識世界に大きな影をおとしているのは、近代的国家や民族を単位とする経済的政治的エゴイズムと、さらにそれらの境界を超えた次元で、不気味な色彩を広げつつある類的なペシミズムなのである。

大槻玄沢は天明三年（一七八三）に脱稿した蘭学入門書『蘭学階梯』を「それ天地人才、誰かその至りを窮め、誰かその地を定めんや」と書きおこしているが、人類がはじめて自らの生息する大地を球とかたちで目のあたりにすることができたのは、つい最近のことであった。つまりそれ以前は、地球は理論上あるいは観測上の「球」であって、誰もそのことを直接自分の目で確かめたわけではなかったのである。

一九六一年四月、一時間四八分にわたる宇宙飛行を終えて無事帰還したガガーリンは、「地球は青かった」という言葉を発して人類最初の地球肉眼視者の面目を果たした。漆黒の宇宙空間に浮かぶ、透き通るようなサファイア・ブルーのまるい大地、というイメージは、今日ではリモートセンシングによる地球探査衛星の画像や、テレビの気象衛星レポートなどで珍しくもなくなっているが、しかしこのとき私たちの脳裏に刻みつけられた、美しく、頼り無げな「水の惑星」像は、ガガーリンのイノセントな発語の上に成り立っているといっている。それからわずか四〇年足らずの間に、日本人の幾人かもそれぞれ宇宙空間からみた地球像を得て帰還するようになった。たしかに彼らが視認した地球の形はまるかったのだが、その色については、もはや透過したサファイア・ブルーとは言えなくなっていたのである。

地図投影法projectionのなかで、しばしば最初に説明される正射図法は、視点を無限遠においたもので、宇宙飛行士の地球を見る視座は原理的にこの図法と相等しい。正射図法に代表的なように、地図投影法とはすぐれて宇宙論的な発想にはかならず、誤解を恐れずに言換えれば、「神の視座」の展開にはかならない。アルキメデスが梃子の原

理を数学的にはじめて証明したときの逸話「吾に支点を与えよ。さらば地球をも動かさん」は、古典古代にあった宇宙空間論的な知のありようを示したものと興味深い。

「地球」という概念の背後には、実は宇宙に浮ぶ巨大な「目」が想定されていたのである。

地図作成は今なお地上において行われる作業である。したがって宇宙に忽然と浮ぶ視点のような「幻想の転位」こそが、小縮尺地図作成の本質であり、基盤とならざるを得ない。LongitudeやLatitudeといった座標モデルは、転位された目の産物だった。

村落や領域、都市や地域といった大、中縮尺地図が対象とする空間のひろがりや、個人的あるいは具体的、身体的はたらきかけと受感のありようによつては、いまだ豊かな実りの地平が遺されているだろう。そこには「人間の視座」の可能性とガイアの豊穡さがある。しかし、神の目は苛烈であつて、私たちが個的な豊穡さに安逸することを許さない。

私たちはたしかに、領邦を単位とする地域の閉鎖エゴイズムを打破した伊能図のインパクトから出発して、近代国家自体の経済的政治的エゴイズムを相対化する宇宙視線の存在にまでたどり着いたのである。

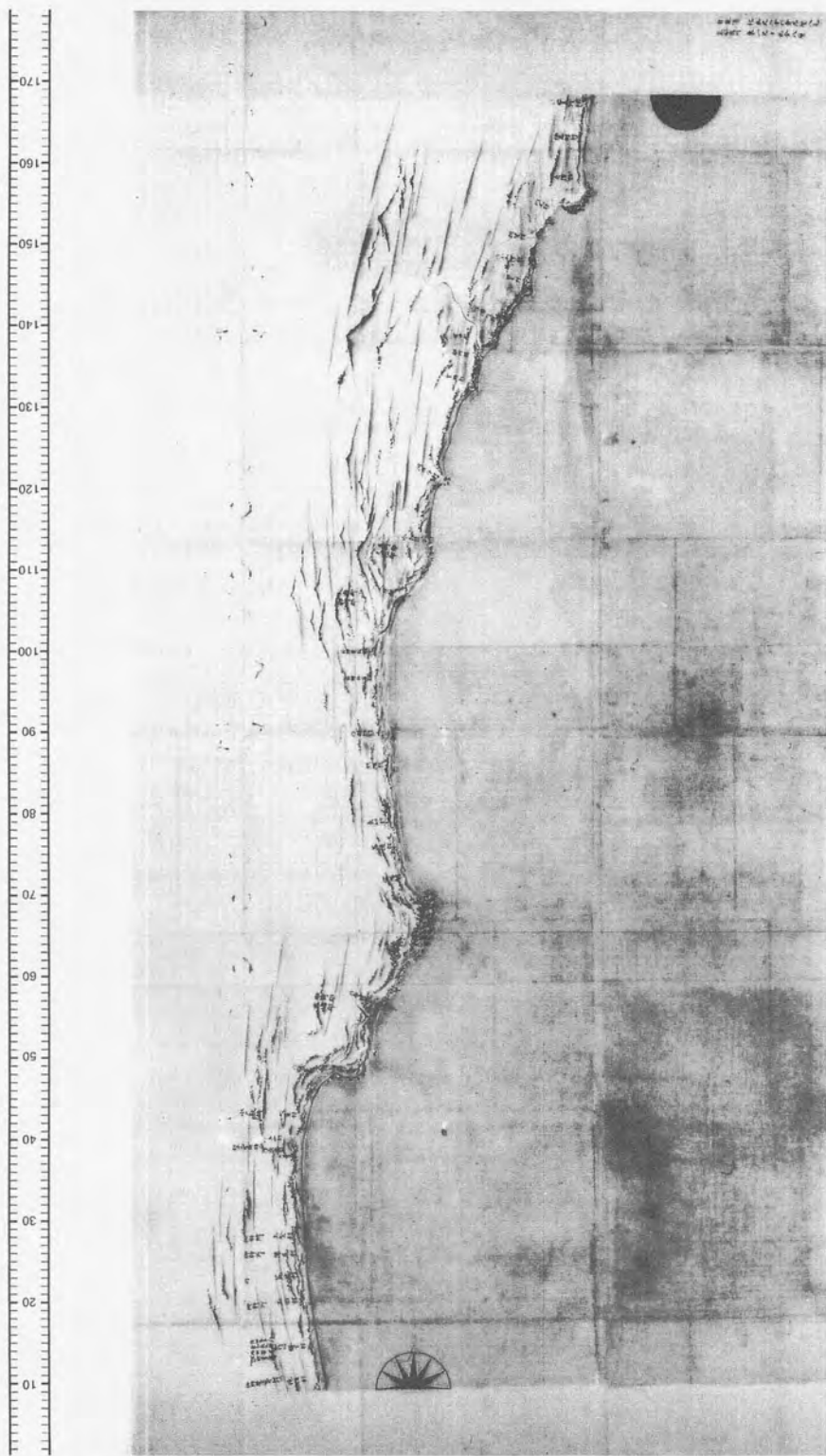
二〇世紀の終末期、幾度かの世界大戦とその危機を経て「公」の正義は、いまや個々の国家もしくは民族のみが保障しあるいは独占しえるものではなくなりつつある。しかしそこに見えてきたのは、サファイア・ブルーの球体を霞のように覆う汚濁物質の微粒子と、その下に広がる「異常繁殖生物」のコロニーとその作用の結果であった。

人類自らをも相対化してやまない、この強力な視線こそ、私たちが到達した歴史的段階の栄光と悲惨を象徴するものなのである。

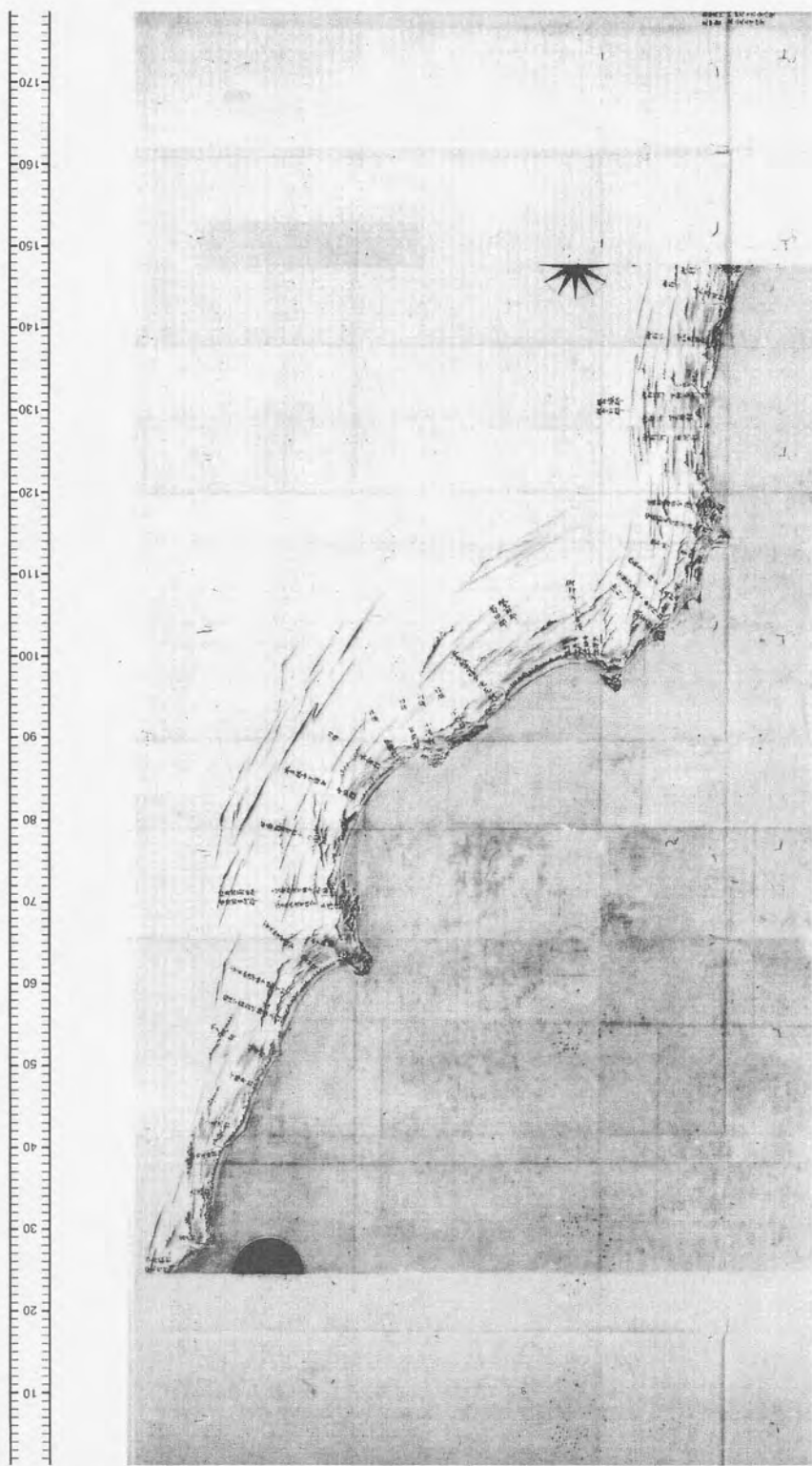
伊能図探求 第十六号

渡辺 一郎

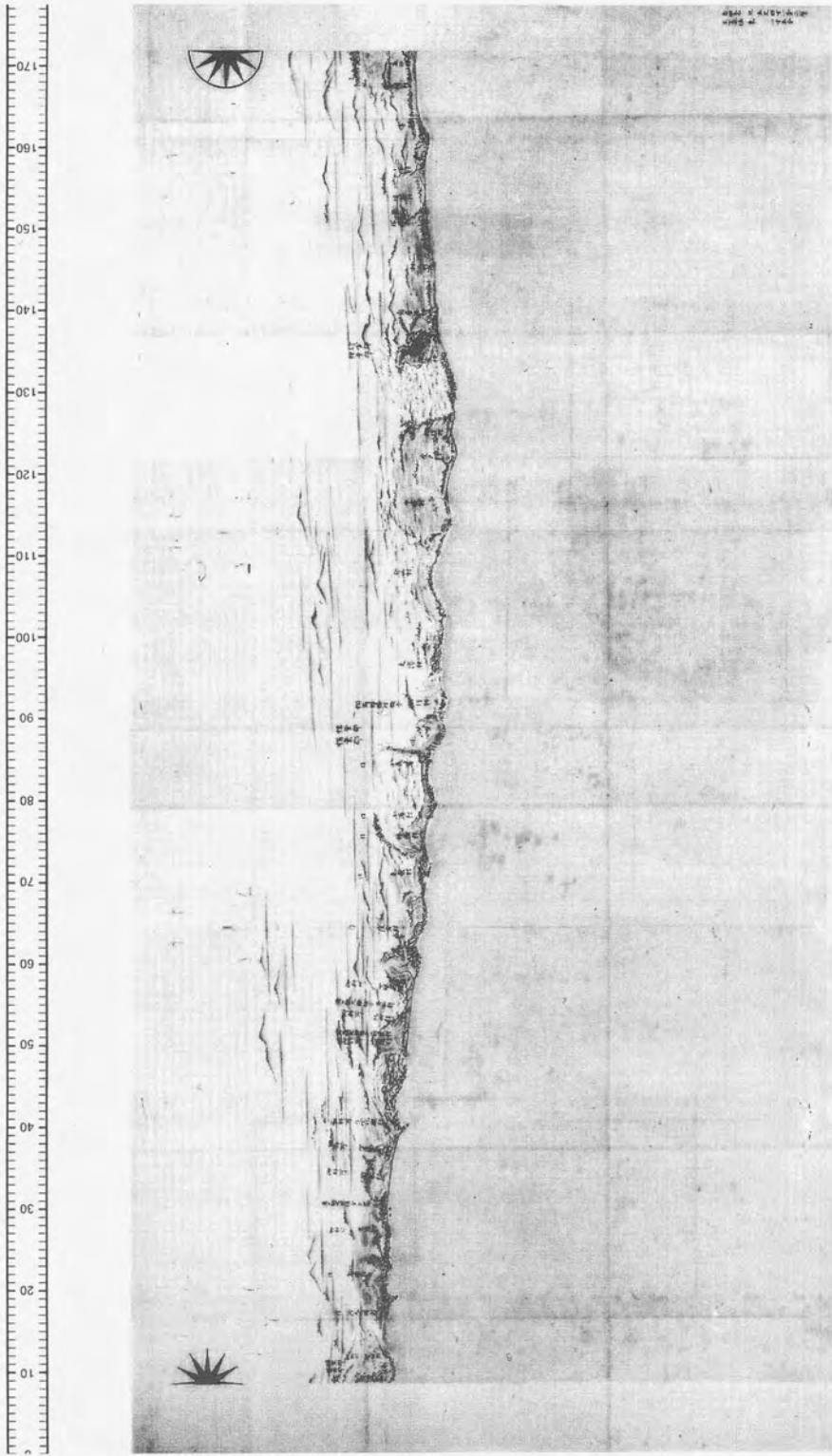
前号につづき伊能忠敬記念館蔵文化元年上呈の大図副本を紹介します。



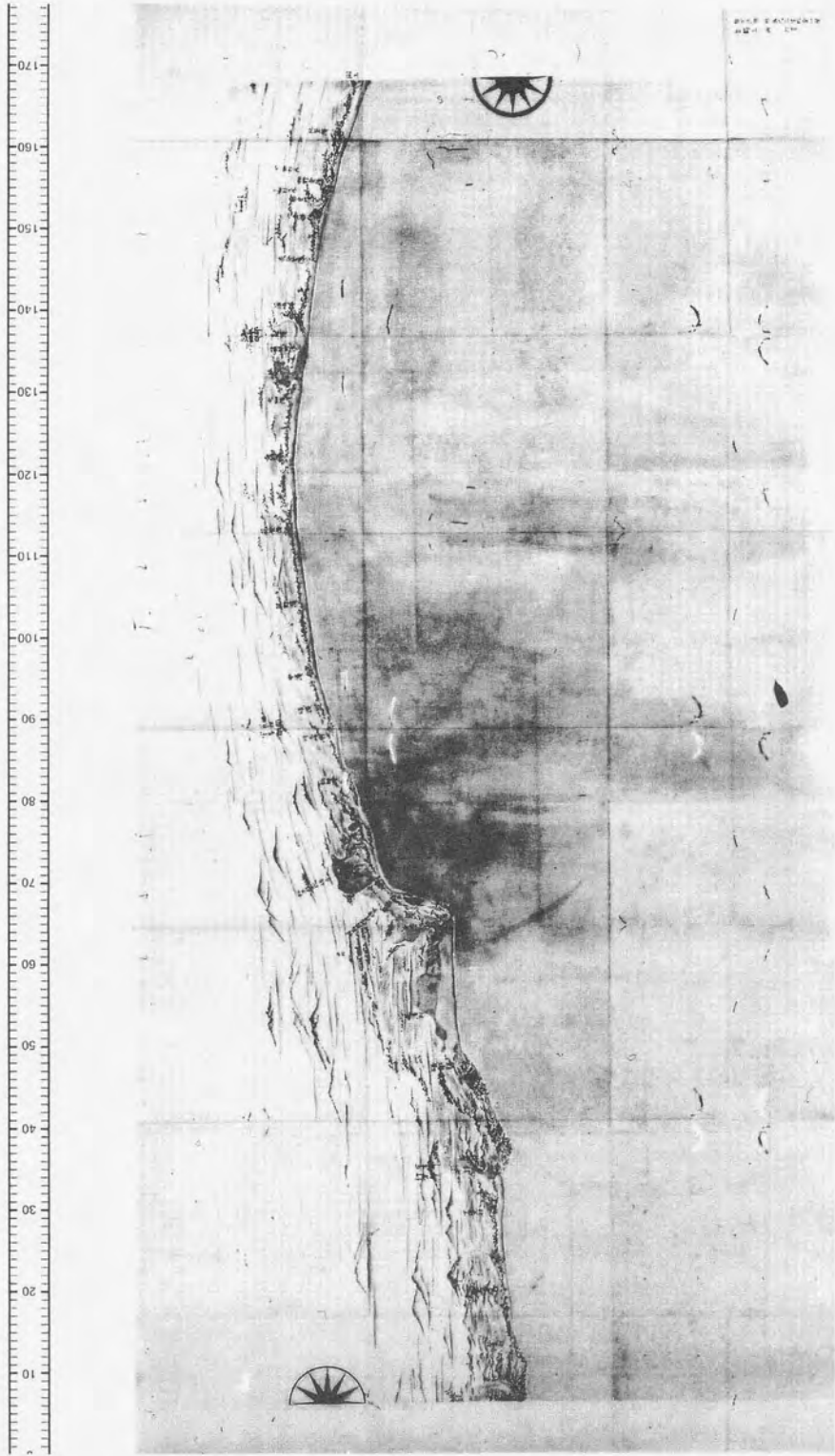
自江戸至奥州沿海図第6 自滝浜至安良川 (86 × 179 cm)



自江戸至奥州沿海図第7 自安良川至四倉 (84 × 179 cm)



自江戸至奥州沿海图第8 自四倉至下渋佐 (87 × 177.5 cm)



自江戸至奥州沿海図第9 自下洪佐至関上 (87.5 × 176 cm)

訂正

●前号二頁、総会報告の文中で議長を務められた神保誠氏は「忠敬の父・貞恒の本家である神保家当主」と訂正いたします。

入会案内

「伊能忠敬研究会」は次のような活動を行っています。

① 本会報の発行 当年度四回。

② 例会の開催 講演会、発表会、各種史料、伊能図の展示説明会、見学旅行などの例会。

③ その他、伊能忠敬に関連するさまざまな事業。

入会方法

住所、氏名、職業、関心分野、電話、ファックス番号を通信欄に記載の上、郵便振替にて年会費六千円を「郵便振替口座 〇〇一五〇・六・〇七二八六一〇 伊能忠敬研究会」あてにご送金下さい。

投稿規定

● 会員の投稿を歓迎いたします。原則として一回の掲載は四頁以内とし、越える場合は分載します。原稿多数の場合、採否は編集委員にお任せねがいます。また、編集委員から一部変更をお願いする場合があります。

● 一頁は、二段組三二文字×二六行×二段で二六二二文字、三段組二〇文字×三〇行×三段で一八〇〇文字です。タイトルと写真はこの中に含めてください。また、提出した原稿は必ず控えをおとり下さい。返却は致しかねます。

● 伊能忠敬研究会・ホームページ

URLは、<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

担当 大友正道

* 本誌の編集委員は次のとおりです(50音順)

安藤由紀子(元国会図書館憲政資料室)・伊能陽子(伊能家)・香取禮良(前佐原市教育委員会次長)・小島一仁(佐原市史編纂委員長)・齋藤仁(学習院女子短大)・佐久間達夫(元伊能記念館館長)・清水靖夫(立教高校教諭・法政大学講師)・芳賀啓(柏書房専務取締役編集長)・渡辺一郎(伊能日本図探研究会代表・会社会長)

編集後記

● 寅年のうちに印刷までと思っておりましたが、とうとう越年して兎がとびだして来てしまいました。けれどもおかげで「大学入試センター」の問題と新聞掲載記事のニュースをお届けできます。

朝日新聞社が盛んに同紙面で伊能さんの宣伝に努めてくださっていることは誠に心強いものがあります。一月二二日には「伊能ウオーク」の見開広告、二三日夕刊にはコラム「窓―論説委員室から」にも記事が載りました。(啓)

● 「伊能ウオーク」いよいよ始まる。たった今、富岡八幡宮でお見送り。心意気と元氣、財力(?)と協力(家族の)に恵まれたうらやましい限りの本部隊の方々へとにかく楽しく元氣でと心からの声援を送ります。(陽)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.18 Winter 1999



ESSAY

- In 'The Cooperation' NISHINO Hajime 1
Attendants of INOH's Survey WATANABE Ichiro 2

TOPICS

- An article of *ASAHI SHIMBUN* 4
'The INOH Walking' and others 5
A Meeting of Kyushu District Branch ISHIKAWA Seichi 6
A question of National Center for University Entrance Exam. 7

STUDY NOTES 1

- About Hanrekijo, the Diary Center ITO Eiko 8

MATERIALS

- Family Documents 11
 KUWAHARA Takatomo ANDO Yukiko 13
 Biroh-jima INOH Yoko 17
 The Death of Kagetaka, the eldest son OKAMOTO Teruko 19
A Survey Diary in 1806 SUGANAMI Hiroshi 22
From Visitors' Registers 24

STUDY NOTES 2

- History and INO Tadataka 3
 A Quest of Longitude and Latitude 2 HAGA Hiraku 25

- THE SEARCH FOR INOH'S MAPS WATANABE Ichiro 29

- OTHER NEWS 33

Edited and Published

by

THE INOH TADATAKA SOCIETY